

國立台灣大學文學院日本語文學研究所

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis



台灣民衆運動家・謝雪紅の抵抗

——知識人との比較を通して——

The Resistance of a Taiwan Activist, Hsieh Hsueh-hung

-Comparison with The Intellectual-

賀子芸

Tzu-Yun Ho

指導教授：辻本雅史 博士

Adviser: Masashi Tujimoto, Ph.D.

中華民國 104 年 6 月

June 2015

謝辞



三年間、終始丁寧なご指導を頂きました辻本雅史教授に心より厚くお礼を申し上げます。論文のことで悩んでいた私に、辻本教授はいつも心温かい言葉で励ましてくださり、おかげさまで私は諦めず最後まで頑張ってきました。

また、本稿をご精読いただき、熱心かつ的確なコメントを頂きました本学の徐興慶教授と国立台北教育大学台湾文化研究所の何義麟教授に深謝いたします。京都大学で一年間にお世話になった小山静子先生にも感謝を申し上げます。ゼミで学んだ論文の作り方を私はいつも覚えていて、大事にしています。そして、四年間ずっと応援してくれた両親にも感謝いたします。

最後になりますが、学友であり、親友でもある鄒評、劉品宜、殷婕、吳勤文、曾婧芳、徐廷瑋、王薇婷、侯紀安にも感謝いたします。大変お世話になりました。ありがとうございます。

要旨



本稿の目的は、台灣植民地時期の社會運動の參與において、知識人と非知識人の出發点や立場の違いを探求することである。まず非知識人の代表こと謝雪紅の生涯を軸にし、謝が終始強權に対して抵抗を諦めなかつた事實を整理する。次に同時代の知識人、蔡培火、蘇新との比較で、謝こそが本当に「台灣アイデンティティー」を持つ革命者であることを証明する。本稿はまず『我的半生記』を引用して謝の幼年期から青年期までの底辺社會経験をまとめる。そしてモスクワでの留学で、謝は共産主義の方法を学び、台灣共産黨の活動で共産主義の方法を日本植民政府に抵抗する武器にした。日本敗戦後、国民党政権の再植民と二二八事件を経験した謝雪紅と台灣民主自治同盟のメンバーたちは「中国正統」の觀念こそが台灣の民主と自由の最大の敵だと気付き、「台灣獨立」から「台灣自治」に立場を転換した。この転換は逆に謝雪紅の「台灣アイデンティティー」を証明したと本稿で説明する。知識人の代表として蔡培火と蘇新を取り上げ、二人とも晩年に強權に妥協し、「中国正統」の觀念を認めた。蔡と蘇は二人共底辺社會に生きる人達と台灣民衆の苦しみに対して、切実な共感を欠けていて、本当の弱者の苦しみをわかっていない。謝雪紅が非知識人として強權に対して終始抵抗の姿勢を取つた革命者の特質が蔡、蘇との比較の中で、さらに強調された。

摘要

本文旨在探究日治時期非知識份子與知識份子在社會運動的參與上，其出發點與立場的不同。非知識份子以謝雪紅為代表，先以其生涯為主軸，梳理謝雪紅自始至終對強權政治的抵抗態度與台灣本位的立場，並在與同時代的知識分子的比較中，凸顯謝雪紅作為一位真正的具有台灣認同的革命家的獨特性。本文先從謝雪紅口述的『我的半生記』著手，整理謝雪紅童年至青年時期的底層經驗，而這些經驗成為日後支持謝雪紅選擇共產主義的基石。在莫斯科的留學經驗與台灣共產黨的活動中，謝雪紅透過實務的社會運動經驗，習得以共產主義抵抗日本殖民主義的方法。在體驗了國民黨政權的再殖民與二二八事件之後，謝雪紅從支持「台灣獨立」轉而主張「台灣自治」，此一轉變意味著謝雪紅與台灣民主自治同盟成員意識到「中國正統」觀念對台灣的威脅性，同時也證明了謝雪紅台灣認同的立場。知識份子以蔡培火與蘇新為代表，兩者雖在社會運動上的路線有所不同，但其共通點便是在其晚年皆與強權政治妥協，接受了「中國正統」的概念，成為強權政治的代言人。而本文將此差異性歸因於知識份子對於底層社會所承受的痛苦缺乏切身的體會，且對強權政治妥協的知識份子對掌權者來說在政治上具有可利用性。在此對照下，更確立了謝雪紅身為一位非知識份子，自始至終堅持抵抗強權政治，永不妥協的革命者特性。



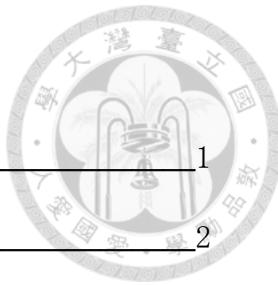
Abstract



This thesis is about comparing the difference of participating of social movement between the intelligentsia and the non-intelligentsia in Japanese Colony Period. This thesis starts from the childhood and youth of Hsieh Hsueh-hung, as the representative of non-intelligentsia. The experience of lower class became the motive which made her choose to be a communist. During Hsieh Hsueh-hung studying in Communist University of the Toilers of the East, she learned how to use communism as the weapon and put it in use to fight against Japanese colonial government and colonialism after she became the leader of Communist Party of Taiwan. After 228 Incident, Hsieh Hsueh-hung turned her point from “Taiwan independence” to “Taiwan Autonomy”. The change meant that Hsieh Hsueh-hung and the other members of Taiwan Democratic Self-Government League understood that “China legitimism” has been threatening the freedom of Taiwan. The change also proved that Hsieh Hsueh-hung did have “Taiwanese Identity”.

In comparison with the intelligentsia, Tshua Pue-Hue and Su Hsin for example, obviously, Hsieh Hsueh-hung had her own “Taiwanese Identity” as a revolutionary. This thesis considers that it’s because that intelligentsia lack the experience of lower class and they can’t really understand the pain of lower class.

目次



謝辞	1
要旨	2
摘要	3
Abstract	4
目次	4

序章

第一節 研究目的	7
第二節 先行研究	11
第三節 問題意識	15

第一章 謝雪紅の共産主義への目覚め

第一節 謝雪紅の底辺社会経験	17
第二節 底辺社会経験と共産主義の連結	28
第三節 まとめ	34

第二章 「台湾独立」から「台湾自治」への転換

第一節 二二八事件の後と「台湾高度自治」の提出	37
第二節 『新臺灣叢刊』と「台湾民主自治同盟」の成立	44
第三節 中国共産党の弾圧と「台湾人無漢奸論」	51
第四節 まとめ	55

第三章 蔡培火と自治運動——謝雪紅から見る右翼運動

第一節 蔡培火の自治論と戦後の蔡培火	68
第二節 謝雪紅と蘇新の衝突	82
第三節 まとめ	102
結章	106
年表	112
資料と文献	114

序章

第一節 研究目的

2014 年の 318 事件¹が爆発した後、そのデモに参加した各団体は、ネットやテレビで大衆の注目を集めたその時に、これらのメデイアルートを通じて自らの主張を宣伝するようになった。これらの主張に刺激され、また多くの団体が成立した。



この一連の流れの中で、筆者はいくつかの事象を指摘したい。その一つは、各団体は「台湾独立」に対して、それぞれ違う展望を持っており、その達成するための方法にも相異がある。こうした相異点が各団体の間の衝突点となった。2 つ目は、各団体は社会運動の理想の形態について、それぞれ違う期待を持っている。318 事件の当時、行動を共にした各団体は、多団体の連合会議で全行動の方向を決めるなどを拒絶した。その結果、ある単一団体が他の団体の意見を二の次にし、全行動を率いることになった。3 つ目は、言葉による意見表明を武器にすることの出来ない人は、団体やデモ活動から排除され、参加しようと思っても出来ず、その発言権が次第に奪われるようになっていた。

この三つの問題はそれぞれ違うように見えるが、その内面は実は繋がっていると考えられる。それは、社会運動において、知識人と非知識人がお互いについて理解が欠けていて、相手の立場や観点に対する理解不足によって生じた対

¹ 318 事件。2014 年 3 月に起きた台湾民衆により、台湾と中国の「サービス貿易協定」を阻止するため国会を占拠し、座り込みを行った事件。日本語ではひまわり学生運動と言うが、学生以外の市民も多数積極的に参加したので、「学生運動」と名付けることは不適切だと思う。今は「ひまわり運動」の代わりに「318 事件」と名称を正そうとする声がある。

立だと思う。特に知識人は、論述や論争において、非知識人より遙かに長じていて、そのため知識人たちも理論の争いに集中し、非知識人の意見を疎かにする傾向があった。318 事件の後期から、これらのことことが問題にされ、検討しようとする声もあった。しかし、1 年後の今でも、知識人と非知識人の間にはまだその対応的に調整されていない。

学術では、知識人の論述はよく研究されるが、非知識人の社会に対する関心はあまり学術研究の対象にされていない。こうした問題を解決するには、まず両者の差異を認め、それから非知識人の社会に対する関心の出発点や立場を分析し、知識人の主張と比較する。また、非知識人が知識人の立場をどう見ているのかを検討することによって、両者の相異点を明らかにすることが必要であろう。

以上のような問題を考えるためには、謝雪紅は適切な研究対象であると、筆者は判断した。

1895 年から 1945 年まで、日本の植民統治下、台湾人は差別され、搾取され、文化が破壊され、自由も奪われた。これらの弾圧政治に対して、台湾人は終始抵抗を諦めなかつた。

謝雪紅は台湾の底辺層に生まれ、母親の葬儀費用のため兄弟たちに「童養媳」²として売られた。しかし、その養母の虐待に耐え切れず、生家に逃亡し

² 童養媳とは、貧しい家から小学生ぐらいの歳の女児を買い、働かせてお金儲けになり、女児

たが、その後また資産家の妾として売られた。商人の夫の張樹敏に連れられ、謝も日本と中国へと同行し、何ヶ月か神戸と青島に住んだことがある。そこで謝が見たのは、米騒動と五四運動であった。この二つの経験を経て、さらに林木順と知り合った。こうした経緯を経て、謝は共産主義活動の道を選んだ。

謝が問い合わせた社会的差別や諸矛盾は、次のようなものであった。まず、日本帝国主義の被植民地として受ける不条理な民族的差別、台湾の資本家階級の労働者に対する搾取の問題、伝統的な男子優越社会における女性差別とそのもとでの婚姻制度の不条理などである。彼女はこうした社会の多様な不条理に、正面から向き合い、それに異議申し立てを行い、抵抗して戦う生涯を送った。つまり何重もの差別と支配を受けた側からの、懸命の抵抗活動であった。

謝の思想と運動を解明することは、台湾社会および台湾の底辺社会層の人たちが直面する複雑な矛盾と葛藤の諸相を浮かび上がらせるはずである。つまり、謝の思想と行動を見ることを通して、近代の台湾社会が抱えざるを得なかった諸問題を、女性の、しかも非知識人の立場からたどり直すことになると考える。

一方、謝と同時代の社会運動に参加していた知識人と言えば、1910年代から1920年代まで東京に留学していた台湾青年たちが代表的であろう。彼らの大部分は体制内の改革を擁護し、六三法撤廃運動から台湾議会設置請願運動まで、新民会や台湾文化協会の成立、また雑誌『台湾青年』、『台湾』、新聞『台

が大人になったらまた自分の息子と結婚させ、子どもを産ませると言う、植民地時代まで行われた台湾の養女制度、実際には一種の奴隸制度である。』

『台湾民報』、『台湾新民報』の成立など、社会運動に力を注ぎ込んだ。



彼らは林獻堂や蔡惠如など台湾の資産家と共に、台湾自治のために植民地台湾と内地日本で活動した。その中でとりわけ蔡培火、林呈祿、羅萬偉らは、代表的な知識人活動家であると言えよう。

また 1927 年、台湾文化協会は右翼と左翼の対立によって分裂し、林獻堂、蔡培火、蔣渭水らは退会して、台湾民衆党を結成した。その後、林と蔡はまた蔣の左翼傾向を理由にし、台湾民衆党から脱退し、台湾地方自治連盟を作った。

ここで見られるのは、林と蔡の一貫した右翼的傾向であるが、戦後台湾の社会運動は 228 事件を始め一連の挫折ののち、林は日本へ渡った。一方蔡は、中国国民党に参加し、権力中枢の一人となった。蔡の行動は、植民地時代から彼の社会運動の仲間たちの反感を買い、白色テロを無視することと国民党による弾圧政治の賛美者となつたことで非難されていた。

蘇新の出身は蔡とは類似性がある。蘇新は公学校を卒業後師範学校に入つたが、日本人教師と学生の差別に対して不満を抱き、ストライキに参加したため退学処分を受けた。その後、日本留学中にマルクス思想に触れ、共産主義の革命路線を選んだ。蘇新も台湾共産党の党員だが、謝雪紅と楊克煌らの「国際書店系統」ではなく、蔡孝乾、王萬得など上海大学、中国共産党党員の背景を持つ「改革同盟系統」に属していた。蘇新は生涯、雑誌や新聞の文筆、宣传活动をしていた。しかし、蘇新と謝は仲が悪かった、その原因は政治理念の違い

なのか、その外にまた何があるのか、本稿で分析を試みる。



以上のような事実をもとに、一体何故、もともと社会的不条理に対する抵抗運動から出発しながら、謝と蔡、蘇は全く違う生き方の選択をしたのか、筆者は考えずにいられない。本稿では謝と蔡、蘇を比較することで、謝の活動の意味を考えたい。

第二節 先行研究

謝はその政治の主張と共産党党员の立場のため、台湾と中国において謝に関する公式記録にも個人の記録にも、捏造、矛盾、根拠のない中傷が多い。陳芳明は『謝雪紅評傳』の一書で、謝に関する公式記録と個人の記録を極めて細かく整理し、捏造と誤りの記録を排除、さらに台湾左翼史の背景のもとに、謝の生涯についての著作を発表した。たとえば、『台灣總督府警察沿革誌』に収録された謝が台湾農民組合のために書いた三つの「綱領」、また謝自身が口述し、楊克煌が筆録した『我的半生記』、そして楊自身の回想録の『我的回憶』とその他の文書など、いずれも本稿には大変重要な資料である。その上、謝が書いた文章も引用し、完全とは言えないが、ある程度は謝の思想状況をも確認できる。

陳の研究は、謝の周りにいた左翼派の人たちとの比較と謝とこれらの人たちとの政治上の比較を主にしていて、これによって謝の政治生命を描き出し、台湾左翼史において謝の重要性と代表性を証明している。

陳によれば、謝は現代台湾の政治家の中では、「圧迫」された少数者の本当の意味を知っている人である。また、男性優越主義、帝国主義、資本主義、中華優越主義の圧迫を受けているから、謝は植民地の抵抗運動は改革ではなく、革命でなければならないと考えていたと陳は主張している。

また、謝の「台湾独立」、「台湾自治」、「台人治台」の主張の転換も問題にされた。228事件の後、謝が香港へ陣地を転じ、台湾時期に主張していた「台湾独立」も「台湾自治」に転換した。また、1949年以降中国共産党の指導を受けた後、謝は台湾民主自治同盟主席の立場で、第一次中国政治協商会議の中で新政協会の共同綱領を受け、「台湾自治」から「台人治台」へと転じた。これ以後、謝は中国共産党の政策の擁護者となり、この動きによって謝も台湾自治を主張する立場を失い、若年の謝の革命精神はここに至って完全に失われたと、陳は述べている。

しかし、陳の研究について、林瓊華は、「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」の一文で幾つかの論点について、その問題点を指摘した。その一つは、陳は自分自身の台湾民族主義という立場を反映して、意図的に謝と中国共産党との歴史関係を否定したこと³、もう一つは、謝の台湾独立主張者のイメージである⁴。そのため、林は「女革命者謝雪紅的『真理之旅』(1901-1970)」の一文によって、『我的半生記』を元にし、謝の人生と立場に関して陳とは異なる意見を提出した。

³ 林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北県：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P158。

⁴ 林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北県：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P164。



一方、植民地台灣の右翼社会運動について、陳翠蓮は「大正民主與台灣留學生」の一文で、植民地時期 1920 年代の台灣右翼知識人は大正デモクラシーの影響を受け、当時日本の言論界の主張を借りて植民政治に抵抗する武器にし、活動していたと主張した。大正デモクラシーの主流の言論は、憲法主義、アジア主義、温和自由主義、キリスト教人道主義などがあって、それぞれの立場から植民地問題に关心を寄せ、同化主義や弾圧植民政治を批判した。故に、植民地青年たちが植民地母国の協力を求める時は、自然に右翼派は左翼派より友好的だと思い、右翼の勢力を頼ることになる。研究の結果を示した通り、台灣留学生が請願運動で提出した主張も、大体憲法主義、人道主義、文明植民説の枠組みの中で文章を書いた⁵。蔡培火はまさにこういう植民地青年の一人である。

蔡は植村正久によってキリスト教徒として洗礼を受けただけではなく、蔡の働きによって植村は人道主義の立場から植民地台灣に対して同情を寄せていた。また、植村の紹介によって、蔡は田川大吉郎、江原素六と知り合いとなり、また田川の助けによって尾崎行雄、島田三郎らの応援を得た。彼らは『台灣青年』に寄稿したり、若しくは帝国議会の中で台灣議会設置請願運動に協力していた⁶。

以上を見れば、蔡培火の重要性を充分に説明していると思う。しかし、蔡

⁵ 陳翠蓮、「大正民主與台灣留日學生」、『師大台灣史學報』、第 6 期、台北市：國立臺灣師範大學臺史所、2013 年 12 月、P84-86。

⁶ 葉榮鐘、『日據下台灣政治社會運動史（上）』、台中市：晨星、2000 年、P218。

の評価に関して、様々な不一致が見られる。蔡の称賛者は大抵植民地時期の蔡の抗日活動を書き、台湾自治と言論自由の要求の主張に立脚し、その貢献を肯定する。しかし、これらの研究は戦後の蔡の行動と文章を取り上げていない。戦後の蔡には、植民地時期の弾圧政治への抵抗意識が見られなかっただけではなく、国民党政権による白色テロにも目を向けることなく、蔡は独裁政治の贊美者となった。戒厳時期に蔡に対する圧倒的な贊美、好評に対して批判的な論者たちは、次のように主張した。

林冠瑜は「論述的彼端——蔡培火話語中的性格與心理」で蔡の日記によつて蔡の個性と心理を分析した。蔡は自分の行動を高い道徳観に合わせて解釈する傾向があつて、自分は如何に台湾の為に努力しているかと強調し、自分の弱さを合理化していると、林は主張した⁷。

洪可均は「日本與中國——蔡培火的『母國』與『祖國』」の中で、植民地時期の蔡が提唱していたのは、植民政府による台湾人への差別待遇を改善することで、「母國」日本の植民政治の正当性への反抗ではないと指摘した。しかし、戦後の「母國」は「敵国」となり、戦前に何度も否定した「祖国」は攻撃してはいけない対象となって、最後に、「党」の存在はまた「祖国」に凌駕する存在となった。故に、蔡の本当の意図にしても、台湾議会のための働きにしても、蔡を評価することは、单一の角度で行うべきではないと、洪は書いた⁸。

⁷ 林冠瑜、「論述的彼端——蔡培火話語中的性格與心理」、『臺灣史料研究』、vol.32、台北市：吳三連台灣史料基金會、2008年12月、P157-158。

⁸ 洪可均、「日本與中國——蔡培火的『母國』與『祖國』」、『政大史粹』、vol.23、台北市：國立政治大學歴史學系、2012年12月、P100。

蘇新について、陳芳明は『殖民地台灣 左翼政治運動史論』で蘇新生涯の政治活動をまとめた。「第五章 蘇新的生平與思想初論」で、蘇が所属していた「改革同盟」と謝の対立を細かく説明し、両者の対立において、蘇の立場と行動は台湾共産党に如何なる影響を与えたかを解説している。謝と「改革同盟」との対立は、表では「赤色総工会」の成立か否かの問題で、謝は「総工会」は各職種の「工会」（組合）を確立してから作る方が妥当だと主張したが、改革同盟派はコミニテルン東方局によって出来るだけ早く「総工会」を作らなければならぬというのである。しかし、その裏には改革同盟派と謝の権力闘争の問題がある、陳はそのように述べている⁹。

第三節 問題意識

本稿は、謝が始終共産主義に固執してきた理由から検討したい。謝は自分の人生を通して何を見てきたのか、それを確認するとともに、これらの経験の謝の人生に対する意味を分析し、謝の行動と思想の根本を確かめる。

これらの部分を整理することによって、謝の中にある男性優越主義、帝国主義、資本主義、中華優越主義の関係も明らかになり、謝の抵抗姿勢も浮かび上がってくる。これらの内容で、陳芳明の研究で挙げた謝の主張の転換に対し、謝の政治理想の内実や中心思想を確認する。

次に、当時の主流であった、右翼知識人運動者の社会運動の視点を考察する。まず、右翼知識人と大正デモクラシーとの関係、とそこから受けた影響を

⁹ 陳芳明『殖民地台灣 左翼政治運動史論』、台北市：麥田出版、2006年、P211。

まとめる。これを前提として、右翼知識人運動者、台湾議会設置請願運動の代表人物と言える蔡培火を取り上げ、蔡の姿勢、思想、アイデンティティーに注目する。また、台湾共産党内部の「改革同盟」に所属していた蘇新を取り上げ、台湾共産党内の男性知識人と謝雪紅との衝突を明らかにする。以上によって、謝の独自性が浮かび上がってくるはずである。また、謝の視点から蔡、蘇の主張を分析し、謝が二人とは異なる路線を選び、結局彼女が生涯、共産主義を堅守していった理由も明らかになると思われる。

謝と二人の比較によって、謝と蔡、蘇とのアイデンティティーも一つの違いも明らかになってくるはずである。これによって謝の抵抗姿勢と政治理想が繋がって理解されていく。謝の抵抗と理想について、現代に生きる私たちは何を学ぶことができるのか考えたい。また、植民地時代から戦後まで、左翼運動者と右翼運動者の衝突の一つの側面を見ることによって、政治的衝突が絶えることがない現代の台湾の政治状況を考える視点も探りたい。

第一章 謝雪紅の共産主義への目覚め



第一節 謝雪紅の底辺社会経験

本稿はまず、謝雪紅の『我的半生記』を軸として、謝雪紅が革命者、共産主義者として生きていた礎——謝の前半生の経験から述べる。

『我的半生記』一書の成立については、以下の通りである。

謝雪紅が『我的半生記』に書き留められた内容を口述するのは、楊克煌の註によれば、おそらく 1970 年の始めだと推測できる。「可憐的謝啊！想不到寫到這裡的八個月後，你就離開人間了！再也不能聽你講你的故事了！」¹⁰（筆者訳：可哀想な謝よ！まさかこの部分を書いた 8 ヶ月後、君は亡くなるとは！もう君の話を聞くことはできないんだ！）と楊克煌は書いている。謝が亡くなった期日は 1970 年 11 月 5 日で、つまりその 8 ヶ月前は 1970 年 3 月くらいである。

1928 年の 8-9 月の頃、謝と楊は既に知り合いになり、楊は書き読みの苦手な謝に代わって文書の仕事をしていた。その後、二人は恋人同志となり、また社会運動の同志の間柄になった。しかし、1931 年 6 月 26 日、謝と楊は日本植民政府に逮捕されたが、楊は 1935 年に先に釈放されて出獄した。当時の楊は、謝は多分釈放されないと想い、その上、暮らしを立てる方法もなく、仕方なく持参金のある女性と結婚し、三人の娘をもうけた¹¹。『我的半生記』の出版者及

¹⁰ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004 年、P83。

¹¹ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009、P182-183。

び編集者楊翠華は、その三人の娘の一人である。



しかし、謝は1939年4月7日に釈放され、二人はまた昔通りの関係に戻った。そして1947年5月、二人は一緒に中国に逃亡し、1970年11月謝が亡くなるまで、謝と楊は事実上の夫婦として生きていた。1992年、謝雪紅が口述し、楊克煌が筆録した謝の前半生を記録したこの資料は、楊翠華が中国から持ち帰り、2004年に『我的半生記』という一冊の本として出版された¹²。

以上が『我的半生記』の成立の経緯である。

1901年10月17日、台湾が日本の植民地になってから六年目、謝は台湾中部の彰化の貧しい家で生まれた。

父親はかつぎ人夫で、母親は日本人家庭の洗濯、養豚など色々の仕事を持っていたが、それでも食べ物にも困る日々を送っていた。富裕層や日本人家庭の残飯を拾い、洗った後食べることもしばしばあり、謝自身も7、8歳の時から日本人の子どもの世話をする仕事を始めた。

謝の両親は二人とも過労で病気にかかって早死にした。葬式をあげる金もなく、父親謝匏が病気で倒れた時に、次女謝純は地主の後妻として売られ、母親陳銀が亡くなった時に三女謝阿女（後に謝雪紅に改名）も地主の養女として売られた。貧困の故に、八人兄弟のうちに四人が売られた。人身売買、特に無

¹² 謝雪紅口述、楊克煌筆録、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P7。

產階級の子どもと女性の売買は、当時では珍しいことではなかった。

1913年旧暦10月、謝が売られた年、彼女はまだ12歳にすぎなかった。



当時台湾の「養女」にはおおむね3つの種類がある。一つは、本当の自分の娘のように養育し、学校も行かせ、大人になつたら嫁に送り出す。もう一つは「査某嫗（嫗）仔」、これは労働力や金儲けを前提として他人の娘を買ったので、大人になつたら嫁ぎ先から金をもらって嫁に出す場合もあるが、娼家などに売り出すことも珍しくない。3つ目は主に自分の息子の妻、もしくは妾として他人の娘を買う。もちろん労働力として働かせる。こういう場合は「童養媳」と呼ぶ。

謝の養父の洪仔喜は元々農民だったが、地主出身の妻と結婚した後、妻の要求で乾物屋を経営していた。謝はこの洪家の長男の「童養媳」として買われた。養母に過重な労働を課せられただけではなく、理由もなく罵られ、殴られた。当時のことについて、謝はこう述べている。

洪家處境漸漸地惡化，也漸漸地把贍養他家和他小老婆家的生活重擔大部分第壓在我的雙肩上了。當時，我還不會聽過任何革命思想，何況我的腦海裡還充滿著許多封建觀念，例如女人的三從四德呵、我是被賣的呵、命運呵等等。自己還未能覺悟，只是聽任命運的擺佈的，又自認被賣給洪家當童養媳，唯有忍受那舊社會殘酷的壓迫和剝削了。¹³（訳：洪家の経済

¹³ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P79。

狀況も段々悪化し、養父家とその妾の生活費の重圧の大部分が私の負担となつた。當時、私は何の革命思想も知らず、頭の中に封建的な思考しかなく、例えば、婦人の三徳四徳や、私は売られた身、運命など、まだ目覚めていない、ただ運命に流されただけ。また、自分も洪家の童養媳として買われたので、旧社会の残酷な圧迫と搾取を我慢するしかないと思つてゐた。)

當時では、同じ仕事をしても女性の給料は男性よりより少なく、さらに、謝の給料と労働の成果はすべて養父母に取りあげられた。自分が受けた封建制と資本主義の二重の圧迫について、謝はこう理解していた。

這個時候，最多只是如列寧所說的：不意識到自己的奴隸地位，而過著默默無言、渾渾噩噩的奴隸生活的奴隸，是十足的奴隸狀態而已。¹⁴（訳：この時は、レーニンが言った通り、「自分の奴隸地位に意識もせずに、ただ無言で、混沌とした奴隸生活を送つてゐる奴隸は、充分な意味での奴隸狀態である。」）

この引用文は、謝雪紅の生涯を示しているように、とても重要な一段落である。原文はレーニンの「紀念葛伊甸伯爵」（初出：1907年6月）である。

意識到自己的奴隸地位而與之作鬥爭的奴隸，是革命者。沒有意識到自己的奴隸地位而過著默默無言、渾渾噩噩、忍氣吞聲的奴隸生活的奴隸，是

¹⁴ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P101。

十足的奴隸。對奴隸生活的種種好處津津樂道並對和善的好主人讚賞不已。以至垂涎欲滴的奴隸是奴才，是無恥之徒¹⁵。（筆者訳：自分の奴隸地位に意識して闘争を行う奴隸は、革命者である。自分の奴隸的地位に意識をせずに、ただ無言で、混沌で、泣き寝入りをする奴隸生活を送っている奴隸は、充分な意味での奴隸である。奴隸生活の種々利益を贊美し、優しくていい主人をも贊美し、よだれを垂らして欲しがっている奴隸は奴僕、恥を知らない輩である。）

この時期の謝は間違いなく奴隸であった。しかし、謝は生涯をかけて強権と差別に対抗し、やがて自分は間違いなく「革命者」であることを証明した。この点について、また第二章で言及する。

養母に過重な労働を課せられた。養母の家庭と養父の妾の家庭、合計6-8人の生活費の殆どが12歳の謝の責任となり、その上、養母の虐待がひどくなる一方だったので、謝は耐え切れず、自殺を決心した。この謝の飛び込み自殺を止め、絶望から謝を救い出したのは近所の女性たちであった。

1918年12月のある日、謝は養家から逃げ出し、生家に帰った。しかし、謝を身請けするお金は勿論ない。その時に、資産家の張樹敏からの縁談がきた。言うまでもなく、この縁談の本質もただの人身売買である。その当時の自分の境遇について、謝はこう理解していた。

¹⁵ 列寧著、中共中央馬克思、恩格斯、列寧、斯大林著作編譯局編譯「紀念葛伊甸伯爵」、『列寧全集 第十六卷』、北京：人民出版社、1988年10月、P37。

在當時萬惡的舊社會，人身買賣是合法的；窮苦人家被迫賣兒鬻女的事是家常便飯，不足為奇的。日帝的法律公然承認人身買賣是合法的，例如，窮人把女兒賣給富人當奴僕（查某嫋仔），日帝美其名為養女；但這種養女常常是不被當人看待的，而且隨時可以在被轉賣。當時的婚姻也大都是買賣式或變相的買賣式；所謂聘禮（聘金）就是這種買賣式婚姻的賣身錢。

（略）…童養媳則是露骨的買賣式婚姻，且兼有女奴僕及養女的性質。

（略）…而我自己只像一隻兔子、一頭豬一般，當人家買賣議價的對象。

¹⁶（筆者訳：当時の罪惡な旧社会において、人身売買は合法である。貧しい人が自分の子どもを売ることは珍しくなかった。日帝の法律は人身売買は合法であると認めている。例えば、貧しい人が娘を金持ちに下女として売ったことを、日帝はこれを養女とみなした。しかし、こういう養女は人間扱いされていない、しかもいつでもまたどこかへ売られることもある。当時の婚姻も大体売買である。いわゆる聘金もこういう売買婚姻の身売りの代金である。…童養媳は露骨な売買婚姻で、しかも同時に下女と養女の性質を持っている。…私はただうさぎや豚のように、売買され、値付けされた商品だった。）

今度は、謝は資産家の妾として売られた。

張樹敏という人物は、一体謝雪紅にとって、どのような存在であるのだろうか、また、二人の関係は謝にどのような影響を与えたのか、これらの問題を考察するために、まず、謝は張樹敏のことをどう思っていたのかから述べて行

¹⁶ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P121-123。

かなければならない。



謝、張、と後に登場する謝の社会運動の同志、林木順の三角関係の中で、
謝は張に非常に嫌悪感を感じるが、『我的半生記』の記述を見れば、張は確かに謝に恋愛感情を持っていたと推測される。張の女性関係はかなり複雑である
が、謝だけには執着心を持ち、神戸、青島、上海も謝一人だけを連れて行った。
さらに、1931年から1939年までの謝が投獄された時期も面会に来て、謝が釈
放された時も自分のところへ帰ってくれないかと彼女に懇願をした。もちろん、
謝は二度とも強く張を拒絶し、張は諦めるしかないということになった。

前述の通り、謝は自分のことを「買われた妾」だと理解し、張という存在
もただ封建制度の象徴で、自分と張の関係も封建制度を前提とした男性が女性
に、資産家が貧困者に対する支配でしかない。謝は自分の出身と学校教育を受
けていないことに生涯コンプレックスを持っていてた。頑固で気の強い謝が、
このような関係に納得するはずがない。特に、封建制度や貧困者の立場を理解
していない資産家などは、共産主義の影響を受けた謝にとっては対抗すべき相
手であり、謝が張に反抗的な姿勢を取るのはやむを得なかつたことであつたら
う。

このような婚姻関係及び社会制度は、資産家出身で、封建制度の既得権益
者としての張には当たり前のことである。つまり、張は謝の苦しみやコンプレ
ックスを理解できない立場にあったと言えよう。

また、上海の五・三〇事件の前後、謝とともに社会運動に参加している人たちやモスクワ留学を終えて上海での台湾共産党の創設期の同僚、もしくは台湾共産党員の中に、やはり男性の知識人が多く、謝を「逃げ出した妾」や「小学生程度の書き読みすらできない女」と差別する人もいた¹⁷。さらに、謝は一人の女性として、台湾共産党の活動を指揮していた。そのため、謝のに対して内心で不満を唱える党員もいた。彼女は生涯このことに悩まされていた¹⁸。

1919年1月、張樹敏は謝を連れて、日本の神戸とへ出発した。そこで謝が見たのは、米騒動であった。この事について、謝はこう述懐している。

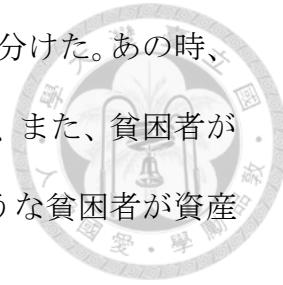
我在神戶的兩三個月間，第一次接觸到日本革命運動，因當時正是日本「米騒動」發生後不久，神戶又是米騒動最激烈的地方之一。米騒動是第一次世界大戰後，因米價高漲，糧食被資本家壟斷、囤積居奇，窮人買不到米吃，於是，廣大勞動人民自動組織起來，去打開壟斷糧商的糧倉，把糧食搬出來分給大家。當時，林姓商人一家人都把他們親眼目睹的情況講給我聽，他還說窮人起來搶大糧商的糧食是合理的。這種窮人和富人鬥爭的事實，第一次在我思想上留下了深刻的印象¹⁹。（筆者訳：私が神戸にいた二三ヶ月間のあいだ、私は初めて日本の革命運動に接触した。それは丁度日本の「米騒動」が始まったばかりで、さらに神戸は一番激しいところの一つであった。米騒動というのは、第一次世界大戦後、米価高騰の中に、食糧は資本家に壟斷され、貧困者は米を買うことが出来なかつた。）

¹⁷ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009、P42。

¹⁸ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P247。

¹⁹ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P128。

労働者たちは自ら組織し、米商の米倉を開け、みんなに分けた。あの時、林という商人の一家は自分の目で見たことを私に教え、また、貧困者が米商の食糧を奪うことは正当であると言った。このような貧困者が資産家に抗う事は私の思想において、強く印象に残った。)



次いで同年 1919 年 4 月、謝は張に連れられ、商売のために青島へ転じた。

5 月、五四運動は中国各地を席卷し、青島も例外ではなかった。当時の青島は日本軍に占領されている状態なので、日本帝国主義への反発は極度に高まっていた。天津大学の学生たちはよく非公開の演説を行い、謝も友人の紹介で演説会を参加した。演説会ではよくロシアの「10 月革命」の話をし、写真や絵などをも紹介した。

その時の気持ちについて、謝はこう述べた。

其中有一張照片，他們說這是工人、農民和士兵去攻打臨時政府機關（冬宮）的情景：遍地覆蓋著皚皚的白雪，遠景的冬宮已被砲彈打中了許多處，一批批革命鬥士正在向它衝上去；近景則躺著許多已犧牲的革命戰士，鮮血灑滿片地，真是個前仆後繼、勇往直前悲壯場面。革命的慘烈情景活現在我眼前，令人熱血沸騰、心情激動久久不能平靜下來，我覺得自己好像在夢中醒過來一般，對革命開始抱著無限嚮往的情感。（略）革命就必定要流血，要革命就會有人犧牲²⁰。（筆者訳：その中に一枚の写真があつ

²⁰ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004 年、P130-131。



た。彼らの話によると、これは職工、農民、兵士が臨時政府機関（冬宮殿）を攻める場面である。地面は白い雪に覆われている。遠景の冬宮殿はすでに大砲に撃たれ、革命の闘士たちは次々と冬宮殿へ向かって突進している。近景には、多くの犠牲になった革命戦士たちである。熱い血が地面で広がっていく、なんという勇敢で悲壮な場面であろう。惨烈な革命の場面を目の前にして、私の胸が熱くなってしまい、動搖のあまりに平静でいられなくなった。私は夢から覚めように、革命に対して限りない憧れを抱き始めた。（略）革命には血を流さなければならぬ、革命をすればきっと誰かが犠牲になる。）

生涯この気持を忘れないために、謝は自分に「雪紅」と名づけた。青島で過ごした1919年の夏、謝は階級闘争思想の存在を知った。それは今までの人生の転換点になったとも言えようと、彼女は述べている。

しかし、この段階の謝は、共産主義について、理論的な理解はまだ乏しい。当時の日本軍の弾圧も激しかったので、革命運動も非公開的な活動が多く、謝は直接に参加したわけではなかった。

1923年の4、5月の間、謝はまた張に上海へと連れられていった。台湾基隆から日本下関への汽船で、謝は留学を目指している林木順と出会い、謝、張、林と林の二人の友人と共に上海に到着した。

上海に辿り着いたら、不平等条約、治外法権、租界地など、帝国主義の跋

扈を知り、謝と林は憤慨し、勉強の目的は少しずつ革命をするための学習に傾き、謝自身も社会活動に積極的に参加するようになった。



1923年6月17日、上海の台湾留学生たちは反日集会を開き、謝と林も参加した。特に謝はその集会の唯一の女性であったため、他の留学生たちにすすめられ、自分の意見を述べてみた。

台灣婦女也應該出來做事，參加社會活動。要台灣人得到幸福，台灣婦女也要參加——好比大石也要小石墊靠一般。²¹（筆者訳：台湾の婦人たちも立ち上がって、社会活動に参加するべきである。若し台湾人が幸せを手に入れたいならば、台湾の婦人も参加するべきである——大きな石も小さな石の支えが必要である。）

ここで見られるのは、台湾人の現実を変えるために、社会運動は必要であり、また台湾人であるという自己意識が現状改変と社会運動に繋がり、その運動の中に、自分の居場所があると、謝は認識するようになった。しかし、実際にはどうすればいいのか、またわかっていない。彼女の実践の試みは五・三〇事件まで待たなければならなかった。

今回の旅は、1923年8月に終わりを告げ、謝は張と共に台湾へ帰ったが、まもなく謝は張と別居し、前の職場——ミシンの販売員——に戻った。この時から、謝は中国へ留学することを強く望み、一生懸命働いてお金を貯め、1925

²¹ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P156。

年の4月に再び中国へ向かい、杭州で、杭州一中に入学した林木順と合流した。

この後すぐ、1925年5月30日、いわゆる五・三〇事件²²が勃発した。



元々帝国主義への反発としての民衆運動はすでに非常に盛んになっていたが、五・三〇事件に刺激され、さらに活発になった。革命運動に対して憧れを抱いていた謝は、こういう社会の雰囲気の中ではもう勉強してはいられないと判断し、思う存分民衆運動に身を投じた。

台湾出身の女性として、謝の活躍はすぐ大衆に注目された。同年6月、謝と林は中国共産党の紹介で「共産主義青年団」に参加し、後に中国共産党党校の影響が極めて強い上海大学への進学を薦められた。しかし、謝は書き読みがほとんどできないので、教科書の内容はなかなか理解できない。とは言え、上海大学への入学は意味がないではない。そうしたなか、1925年10月、謝と林は中国共産党員黃中美から、ロシア留学の中国共産党の指示をもらった。その目的は、台湾で共産党を創設するための幹部育成でにあった²³。

第二節 底辺社会経験と共産主義思想の結合

ロシアのモスクワの東方勤労者共産大学で留学した2年間は、謝と林は同じく日本クラス（正式の名前はビュロー）で共産党の幹部育成の訓練を受けて

²² 五・三〇事件。「五卅運動」、もしくは「五卅事件」ともいう。1925年2月上海の日本工場で年少労働者が日本人の管理者に殴り殺されたことが起因で、その後、上海、青島の日本工場の労働者がストライキを起こした。5月、工場側代表と労働者代表との交渉中、工場側代表が労働者代表を射殺し、ストライキとデモ活動がさらに激しくなり、やがて上海全域の反帝主義運動になった。しかし、30日、大量の中国学生がイギリス巡捕と衝突し、デモ参加者合計13人が射殺され、40人が負傷、逮捕された。

²³ 謝雪紅口述、楊克煌筆録、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P181-191。

いた。そのため、二人共中国共産黨の党員より、日本共産黨の党員とよく交流していた。



ロシア留学の意義は、謝が共産主義の理論を学び、自分の武器にしたことにあると考えられる。その具体的な例として、『我的半生記』では、謝と日本クラスのクラスメートとの衝突を記録している。

日本班同學大都是出身「好」的，大部分是現代產業工人或產業工人的子弟，只有幾個人是資產階級知識份子（Bourgeois Intelligentsia——ブルジョアインテリゲンチャ）。因此在日本班產生了一種傳統思想氣氛，即：他們認為日本是東方工業最發達的國家，他們認為現代產業工人，是真正的無產階級、是最先進的；他們無形中產生了驕傲的心理，看不起、不重視落後民族，歧視殖民地人民，以致於發展到對民族問題、殖民地問題和農民問題的不正確看法。他們自認為只有先進的現代產業工人才能決定世界革命的大局。當時，我竟被他們認為是一個殖民地資產階級小姐，要不然怎能出國留學²⁴。（筆者訳：日本クラスのクラスメートは大体「良い」出身である。殆どは現代產業の工人もしくは產業工人の子弟で、數人だけが資產階級の知識人（Bourgeois Intelligentsia——ブルジョアインテリゲンチャ）。これが原因で日本クラスには一種の伝統的な思想の雰囲気がある。即ち、日本は東方において工業の最も發達している国なので、現代產業の工人こそが本当の無產階級で、最も先進的である。彼らは無意識に傲慢になり、後進民族を見下ろし、植民地の人民を差別

²⁴ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P210。

する。そのため民族問題、植民地問題と農民問題に対して正しくない考え方を持っていて、先進的な現代産業の工人こそが世界革命の大局を決められる。あの時、私は植民地資産階級のお嬢様出身だと間違われていた、でなければ留学ができないはずであるのだから。)

我感覺到日本班有這樣情況後，即同日本班支部的負責人秋田討論這個問題。我用列寧的教導——即資本主義國家的先進的無產階級要幫助殖民地人民即落後民族起來革命，不應該歧視、疏遠或拋棄他們。——來批評日本班對待殖民地等人民的態度。但是，連做為一個支部負責人的秋田都同樣有那種錯誤觀念和心態，以致於不能完全接受列寧的有關教導²⁵。（筆者訳：このような状況を気づいた後、私は日本クラスの責任者の秋田との問題について議論した。私はレーニンの教え——資本主義国家の先進的な無產階級は植民地の人民と後進民族を助け、革命をする。差別、疎遠、見捨てるわけにはいかない。——で日本クラスの植民地などの人民に対する態度を批判した。ただし、支部の責任者の秋田さえもあるような間違った考え方と態度を持っていて、レーニンの教えを全く受け入れられなかった。）

その後、この差別問題と日本クラスの他の問題が指導員に知らされ、検討会で取り上げられた。謝は検討会で、日本クラスに於ける差別問題を提出し、指導員の了解を得た。指導員も謝の意見に賛同し、日本クラスのクラスメートたちも自分の間違いを認めた。

²⁵ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P219。



1927年11月、謝と林はロシアの留学を終えて上海に戻り、1928年4月15日、台灣共産党こと、「日本共産党台灣民族支部」が成立した。書記長は林木順である。

しかし、4月25日の上海読書会事件²⁶で、林は逃亡し、謝と他の4人は逮捕された。1928年6月、証拠不足のため、謝は台灣で釈放された。書記長の林の不在と他多数の党員が逃亡したという窮地の中でも、謝は諦めず、一人で党の再建を目指した。この情勢の中に、謝はまず工会、産業別組織などとの連合同盟の糾合に力を入れた。

そのために、謝は「社会科学研究部」を作った。この読書会と謝の活躍で、農民組合の重要幹部は多数台灣共産党員になった。そのうちには簡吉、趙港、簡娥、楊克培らも含まれている²⁷。幹部が共産党に参加したため、農民組合も急速に左翼寄りの組織になった。また、後に連溫卿は謝の主導によって新台灣文化協会から除名され、新文協も実質的に台灣共産党の配下となった。その結果として、農民組合も新文協も、謝の手によって台灣共産党が指揮する「統一戦線」の一部となり、台灣共産党も当時の左翼運動の一大勢力となった。

謝は「台灣農民組合青年部組織提綱」「台灣農民組合婦女部組織提綱」「台灣農民組合救済部組織提綱」の3つの文書を起草し、1928年8月29日の農民

²⁶ 上海台灣読書会は台灣共産党の関係組織で、そのメンバーは殆ど台共の党員である。この読書会は1928年3月から4まで合計3回も日本警察によって検挙された。謝は逮捕され、林木順は逃亡した。

²⁷ 陳芳明『殖民地台灣 左翼政治運動史論』、台北市：麥田出版、2006年、P73-74。

組合中央委員会に提出した。審議の結果は採択されることに決定し、この方針に基づき青年部、婦女部、救濟部の確立と拡大を行うべきことを決議した。



「台湾農民組合青年部組織提綱」の内容について、謝はこう述べていた。

無産青年運動発展の直接原因は彼らが資本主義制度下に於ける工場、農場、鉱山其の他各種生産機関及び事務所等に於て労働し、極度の搾取を受け、彼ら自身の地位及び使命を認識し、斯くて自己の階級的利益擁護の途を知り、起つて団体を組織して搾取に抗争し依つて自己の階級隊伍を防衛せんとしたるに起因す。²⁸

ロシア留学前の謝は確かに書き読みが殆どできないと言えるが、謝の署名が付いている文章、もしくは書き読みの仕事の多くは、謝の口述と林木順の代筆によって完成したものである。ロシア留学を終えた後、謝の文章力も確かに向上したが、やはり自力で文章一つを仕上げることも難しく、大体謝がまず草稿や大要を書き、また謝の口述と林の代筆で文章を完成したということが、『我的半生記』では何度も言及されている²⁹。台湾農民組合のこの三つの提綱もこのような方法で完成したと推測できる。この時点で謝はすでに楊克煌と知り合いになり、『我的半生記』も楊の筆録で完成した。この事実から見れば、この三つの提綱も楊の助けによって出来たと考えられる。

²⁸ 台湾總督府警務局編、吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942年、P1072。

²⁹ 謝雪紅口述、楊克煌筆録、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P177、223、247-249。

また、「台灣農民組合婦女部組織提綱」について、以下の内容は注目すべきである。



我等台灣婦女が現在生存する資本主義社会は經濟上、社會上或いは特殊の總督政治等、數層の圧迫により饑寒、威嚇、輕侮を受け生活不安は已に日一日深刻を加へて更に封建殘餘勢力の圧迫——宗教道德、家族制度等などの束縛を加へ——女子をして深き非人間生活の慘境に陥らしめたり。

故に台灣婦女は自らを開放するが為に無產階級運動に参加し、其の指導下に団結せざるべからず。換言すれば婦女運動は即ち無產階級運動の一部隊たるべし。

我等は現制度下に在りては啻に男子と同等の待遇に到り得ざるのみならず、婦女を一個の人とさへ認めず、有する権利は総べて剥奪し去られん。我等知る、日本帝国主義の治安警察法第五条——婦女は絶対に政治結社に加入するを許さず——此れ彼等の立憲国たるの真義に違反せり。我等農工階級の恩人レーニンは我等に告げて曰く「政治闘争は婦女の為に其の圧迫を脱する第一歩なり」と、我等台灣婦女は徹底的解放を要求し、法律、其の他一切の障害物を排除すべし³⁰。

このようにみてくれば青年部、婦女部、救濟部の三つの綱領は、謝のロシ

³⁰ 台湾總督府警務局編、吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942年、P1073-1075。

ア留学の成果と言えよう。



第三節　まとめ

謝雪紅は自分自身の底辺社会経験、婚姻経験から、台湾人が向き合っていた封建制度、男性優越主義、帝国主義、資本主義の諸問題を気づいた。そして、問題を解決するために、謝は深く考え、そうした中で共産主義に触れたことによって、苦境の突破口を見つけたのである。

「米騒動」の事件を通して、「貧困者」と「資産家」の二つの階級の存在が認識され、謝の自意識も受動的な封建的な奴隸から能動性のある無産階級へと次第に変わり、自分と自分の所有者、例えば養母や張樹敏、との対立も、階級によるものだと意識できるようになった。「貧困者の資産家への闘争」はただ可能性があるだけではなく、もし社会の不平等が資産家の私利私欲によって生じたものだとすれば、生活に行き詰った貧困者の闘争は正当であると、謝は捉えるようになった。

米騒動から五四運動まで、この時期の啓蒙について考察してみると、やはり一番の意義は、この二つの事件を通じて、謝は帝国主義と行き過ぎた資本主義の二重の圧迫の下に民衆の反抗の力を知った。今までとは違い、より良い生活と社会があって、それを手に入れる方法もある。しかも、このような力は、自分の中にもあるかもれない、自分も努力すれば出来るかもしれない、そのように彼女は悟ったのである。

換言すれば、今まで自分の身に降り掛かった不幸は「運命」などの不可抗力がもたらしたものではなく、社会制度の問題だと気付き、自分の人生の主導権を取り戻すことも可能であると、謝は薄々と気づいたのである。



そしてロシアで謝は共産主義という方法を学び、日本クラスのクラスメートとの衝突で、差別問題を解決するためにその方法を実行した。

台湾共産党が成立して、台湾へ帰った後も、謝も同じような行動を取った。台湾農民組合の三つの提綱が示した通り、謝自身も勿論その「無産青年」と「婦女」の一人である。謝は共産主義の思想で自分の境遇を理解して分析をし、自身の経験から、武器としての共産主義によって解決の方法を提出し、搾取、圧迫された無産階級の困難を解決しようとした。この解決法を自分だけではなく、自分と同じ「階級」の人たちにも適用する。女性、特に無産階級の女性は立ち上がるべきで、無産階級運動の一部隊として戦う必要があると、謝は考えたのである。

女性の問題に关心を寄せていた女性共産主義者と女性社会主義者の中で、女性の問題をただ性別の問題として扱う人は少ない。女性が圧迫された本当の理由は「男女の対立」や「男性の女性に対する支配」などではなく、むしろ封建制度に植民政治と資本制度が加わった末に、さらに女性を追い詰めたと、彼女は理解した。「性別の問題をただ性別での方法で扱わない」という点において、謝以外では、日本の、同時代の山川菊栄³¹もそう考えていた。

³¹ 山川菊栄。旧姓青山、母側の曾祖父は儒学者・史学者の青山延寿。夫は山川均。働く女性



謝がこの点に気づいたのも、彼女の底辺社会経験によるものだと考えられる。謝は養母から異常な虐待を受けたことについて、謝はこれは養母の資産家としての本質だと理解する³²以外に、養母自身も封建制度の被害者だと捉えている。養母は養父が妾を持ってから冷遇され、元々性格の強い人だから極度の怒りを抱えても、養父の行動はどうにもできない。それ故、この点においても、資産家としての養母もまた、封建制度の被害者である。そのように、謝は確かに理解したのである³³。

謝は自分自身の経験を通じて、封建制度における女性の複雑な立場を認識したので、女性の問題はただ性別の問題ではなく、台湾人全体の問題であり、また封建制度と帝国主義こそ台湾人を苦しめてきた原因であると主張した。

換言すれば、謝の中には常に多重の圧迫を受けている台湾人の影があり、これらの苦痛と謝の独自の抵抗の精神は謝が革命者として生き続けた原動力であると考えられる。

と子育てについて繰り広げられた所謂「母性保護論争」（1918-1919年）において、山川は、資本主義がもたらした生活苦の問題は、ただ女性の問題だけではないと述べた。故に資本主義そのものに注目すべきだと主張した。

³² 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P73。

³³ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P73。

第二章 「台湾独立」から「台湾自治」への転換



第一節 二二八事件の後と「台湾高度自治」の提出

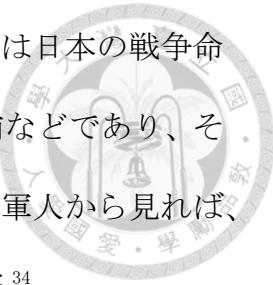
この後、台湾共産党は官憲の弾圧で、活動が制限され、その上台湾共産党内部の権力闘争で、1931年5月親中派の潘欽信、蘇新、王萬德らは謝と楊克煌は党から除名された。これで中国共産党の台湾共産党への指揮権が確定し、謝の台湾共産党への影響力は低下した。しかし、1931年6月26日、官憲の大規模な取り締まりで党員の大多数は逮捕された、謝もその中の一人である。謝の釈放は1939年4月まで待たなければならない。

1941年太平洋戦争が爆発し、植民地政府の台湾の社会運動に対する弾圧は激しくなり、その四年後1945年8月15日に太平洋戦争は終わった。それによって、台湾の社会運動はまた別の新しい局面を迎えた。

戦後から1947年2月二二八事件まで、台湾の政治、生活、民衆と国民党政権との衝突について、『狗去豬來 二二八前夕美國情報檔案』の一書でその一側面を記録されている。

本書の出版については、海外台湾人Nancy Hsu Flemingがアメリカ議会図書館で偶然でWilliam Morganが1945年から1947年までアメリカ合衆国国務省への報告書を見つけたことが契機であった。その後、Nancy Hsu FlemingがWilliam Morganの息子から同意を得て、この報告書を台湾で翻訳して出版することになった。1945年から1947年の当時、William Morganはアメリカの戦略

諜報機関（Office of Strategic Services）で働いていて、彼の任務は日本の戦争命令の情報、失踪したパイロットの行方の捜査、日本戦犯の逮捕などであり、その報告書としての電報はほぼ毎日送っていた。一人のアメリカ軍人から見れば、当時の台湾はどう映っていたのか、本書に詳しく記されている³⁴。



1945年10月5日国民党政権による「台湾省行政長官公署前進指揮所」が成立し、1945年10月15日に国民党軍が基隆に上陸した。大多数の台湾人はやっと被植民者の立場から解放されると、期待と喜びの気持ちで国民党政権を迎えた。ところが、一ヶ月も経たないうちに、台湾人は国民党軍の暴行を知ることになった。

William Morgan の 1945 年 10 月 26 日の電報では、中国軍隊による強盗事件が多数報告されたと記している。中国軍隊は武器の摘発を口実にし、民家に侵入して金銭、腕時計、アクセサリーなどを強盗した。特に台湾の北地域の被害はかなり深刻であった。さらに、病院、日本軍倉庫、商店などまで被害を被り、金銭、ブランケット、医薬品、腕時計、日本警察の日本刀、ジュアリー、衣服、貨物など、中国軍隊による大規模な強盗犯罪が発生した。しかも、中国軍隊はこれらを暴行の事実をアメリカ軍に着せようとした。そして 11 月 5 日までに、合計 1000 件以上の攻撃事件と強盗事件が報告された³⁵。

1945 年 11 月 23 日の電報では、当時台湾の政治、民生の総合情報が記録さ

³⁴ Nancy Hsu Fleming 著、蔡丁貴訳『狗去豬來 二二八前夕美國情報檔案』、台北：前衛出版社、2009 年 2 月、P5-13。

³⁵ Nancy Hsu Fleming 著、蔡丁貴訳『狗去豬來 二二八前夕美國情報檔案』、台北：前衛出版社、2009 年 2 月、P91-92、。

れている。台湾の各団体と各階層の男性の発言によると、台湾の一般民衆の中
國行政公署への不信感は募る一方であった。中国人の不用意は台湾の大衆から
見ても明らかなことである。新しい行政公署は台湾の漢人を組織から排除し、
植民時代の「戦時特別税」を取り消す意向もない、さらに、自分の親戚を有力
ポストにつけ、日本人を政策顧問と技術者として雇用することなど中国人の動
きについて、台湾人は不平を感じていた。食糧問題、インフレ、強盗犯罪の拡
大など、中国人は解決する意欲が無いだけでなく、軍隊でこれらの組織のある
強盗集団を守っている。

しかも、新政権の協力者は悪名高い人ばかりで、彼らが市政府や省政府の
上層部で働いている。また、官僚と一部分の台湾人との間では、多額の金錢が
動いている様子があり、日本人が残していった事業の利益を狙って企んでいる。

台湾人は中国人に被植民者として扱われていて、しかも、台湾人が自分を
管理することは不適切だと、中国人は思っている。³⁶

以上の問題は解決する痕跡もなく、さらに各種の汚職、賄賂、失業率、イ
ンフレ、食糧問題などの問題がひどくなる一方であることなどが、報告書の隨
所に記されている。台湾民衆の中国軍、国民党政権への不満は募る一方であつ
た。このような状況において、二二八事件³⁷が爆発した。謝と楊克培も民兵に

³⁶ Nancy Hsu Fleming 著、蔡丁貴訳『狗去豬來 二二八前夕美國情報檔案』、台北：前衛出版社、2009年2月、P108-111。

³⁷ 1947年2月27日、台北市で闇煙草を販売していた台湾人女性に対して、取締の役人がその頭部を殴り、女性は血を流して倒れた。目撃者たちは役人の暴行に不満に思って集まった。今度役人は民衆に発砲、無関係な台湾人を射殺し、逃亡した。28日民衆のデモ隊は行政長官公署を包囲したが、公署の屋上に隠されていた機関銃に掃射されて、死者多数。台湾民衆は憤慨

参加したが、やはり国民党軍に敵わず失敗し、二人とも指名手配犯とされた。

1947年4月、謝と楊たちは国民党軍の軍艦船員に賄賂をおくり、密航によつて上海へ渡り³⁸、その後、6月に香港に辿り着いた³⁹。



香港時期の謝の思想状態を確認する前に、先の台湾共産党の「台湾独立」の主張に触れる必要がある。林木順が起草した台湾共産党政治大綱では、台湾民族は台湾独自の歴史を経て、特別の経済発展の過程の中に生まれたものであると明記された⁴⁰。外来政権への反発として、革命を起こす。その目的は台湾民衆の解放と台湾民族の独立にあつた⁴¹。

台湾共産党の成立目的について、林が起草した「政治大綱」には次のように明記されている。

政治的自由を獲得する為の一切の運動は我黨に於て大衆運動に大衆を動員することに依らなければならぬ。

台湾共産黨當面の口號は次の通りである。

一、總督專制政治の打倒——日本帝国主義の打倒

二、臺灣民衆獨立萬歳

三、臺灣共和國の建設

し、民兵隊も作ったが、国民党軍の鎮圧や一般市民まで無差別虐殺する暴行に敵わず、台湾は国民党政権による白色テロと戒厳の時代に入った。

³⁸ 古瑞雲『臺中的風雷』、台北市：人間、1990年、P162。

³⁹ 古瑞雲『臺中的風雷』、台北市：人間、1990年、P178。

⁴⁰ 台湾總督府警務局編、吳密察解題『台湾總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942、P601-602。

⁴¹ 台湾總督府警務局編、吳密察解題『台湾總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942、P605-611。



- 四、工農壓制の惡法撤廢
- 五、七時間勞働——勞働せざる者は食を得ず
- 六、罷工、集會、結社、言論、出版の自由
- 七、土地を貧農に歸與す
- 八、封建殘餘勢力の打倒
- 九、失業保護法の制定
- 一〇、日鮮無產階級暴壓惡法に反対
- 一一、ソヴェート聯合の擁護
- 一二、中國革命の擁護
- 一三、新帝國主義戦争に反対⁴²

台灣共產党は20世紀の台灣で最初に「台灣革命」の概念を提起した政治組織であり、台灣史上初めて「台灣独立」を提出した政治団体でもあると陳芳明は『日據時代台灣共產黨史』の一書で明記し、台灣共產党が「台灣独立」を提起した意義を示した⁴³。台灣共產党の創設党员の一人で、台灣時期の謝も党员として「台灣独立」の擁護者だと考えられる。

二二八事件の直後の謝の立場について、「台灣事變女英雄謝雪紅告同胞書」の一文が詳しく書いてある。『台中的風雷』の記述によれば、「告同胞書」も楊克煌の手を借りて完成したものである。謝個人の立場以外に、香港に逃げて中國共產党の援助と指導を受けていた台灣共產党党员たちの声明の意味もある。

⁴² 台灣總督府警務局編、吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942年、P611。

⁴³ 盧修一、『日據時代台灣共產黨史』、台北市：前衛、1989年、陳序 P10。

また二二八事件の直後なので、わざと執筆時間を7月、場所を上海にした⁴⁴。

「告同胞書」は1947年8月25日の『南僑日報』において刊行された。それは二二八事件の後、中国共産党の助けを求めていた謝の政治主張の転換を表していた。

この文章の中で、謝は台湾の二二八事件における民衆の行動を「世界と全中国の反独裁・民主自治をかち取る路線に完全一致していた」という理由で両者を連結し、さらに国民党政権の横暴を指摘した⁴⁵。

まず第一に、今回の蜂起は独裁者によって蹂躪され鎮圧されたために、表面的には失敗に終わってしまいました。しかし、今回獲得した成果は決して少なくありません。実質的には中国本土の人民の民主をかち取り飢餓に反対する闘争に呼応して、蔣介石の二個師団の軍隊を台湾に派遣させることによって、国内人民に対する進攻に動員できなくさせました。そればかりではなく、ファシスト独裁者と国民党・三民主義青年団の無能ぶりを暴露しました。（略）これらのことは、台湾人民が貴重な多くの血を流した代償として得られた成果であります。

台湾各階層の人民は、新しい台湾を建設するために、一せいに自覚を高めて団結し、たえず奮闘しなければなりません。われわれの目標は最も徹底的な民主自治を要求することにあります。そのためには、独裁に反

⁴⁴ 古瑞雲『臺中的風雷』、台北市：人間、1990年、P181。

⁴⁵ 謝雪紅「台灣事變女英雄謝雪紅告同胞書」、『南僑日報』、シンガポール、1947年8月25日、第一版。

対し、内戦に反対し、封建的な保甲制度（解放前に国民党は戸を単位として戸長をおき、十戸を甲として甲長をおき、十甲を保として保長をおき、相互監視と連座法を行った。また、台湾総督府は1899年の「保甲条例」を制定して中国の伝統的な「保甲制度」を採用し、「壮丁団」を組織し、これを警察の補助機関とした）に反対し、連帶保障・連座制に反対し、人民の基本的自由を保障し、労働者の待遇を改善し、失業者を救済するとともに、土地改革を実施して耕す者が自分の田を持つようにしなければなりません。また、二二八事変およびそれ以後逮捕された志士や一切の政治犯を即刻釈放し、日本の台湾に対する野心を打破し、アメリカ帝国主義の侵略を打倒し、国連による台湾信託統治に反対し、いかなる国も台湾に特殊な権益をもつことに反対しなければなりません。

上海に来てから私は多くの民主人士を訪ねたり、祖国の人民が立ち上がるのを目撃したりして、至るところで民主をかち取り、独裁に反対し、内戦に反対し、飢餓に反対するために命がけの闘争が進められていることに気づきました。その結果、私はますます人民の勝利がすでに目前に迫っていることを確信しました。⁴⁶

文章の内容が示した通り、謝は「独立」ではなく、「民主自治」を提唱し、「祖国」という言葉を使って中国共産党の掌握下の中国を指した。自分が向き合っていたのは国民党政権とその背後にあるアメリカ帝国主義で、この二者と

⁴⁶ 謝雪紅「台灣事變女英雄謝雪紅告同胞書」、『南僑日報』、シンガポール、1947年8月25日、第一版。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P289-290。

対抗するために、中国共産党の反国民党勢力は必要であると謝は判断していた。



巨大な国民党勢力とアメリカ帝国主義に向かって、支援も資金も殆どない。謝はこのような状況においても妥協しなかった。謝が考えていたのは、如何なる方法も中共の勢力を借りて、台湾を再植民から解放することである。

第二節 『新臺灣叢刊』と「台湾民主自治同盟」の成立

ほぼ同じ時期に、謝雪紅は楊克煌、蘇新らと刊行物を創刊するため、「新台湾出版社」を設立した。その刊行物は『新台湾叢刊』である。『新台湾叢刊』の第一冊の出版期日は1947年9月25日、その後の11月に「台湾民主自治同盟」(略称「台盟」)の設立準備会が設立した。さらに、台盟の中心と言える謝、楊、蘇の三人も『新台湾叢刊』を直接に刊行物の運営、編集を担当していて、謝自身も寄稿したことがある。そのため、『新台湾叢刊』は相当な程度で謝と台盟の立場を表していると推測できる。

中国共産党の勢力を借りて、国民党政権とその背後にあるアメリカ帝国主義に対抗することの外に、その次の一步はこの『新台湾叢刊』に掲載されている。謝雪紅が『新台湾叢刊』で使用したペンネームは、「斐英」や「一斐」であった。これは彼女自身が1920年代に使用していた「謝飛英」という名前に由来していた⁴⁷。

(筆者註：新しい中国の連合政府は) 不是那個黨派要來代替這個黨派，

⁴⁷ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P295。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P318。

或是誰要來代誰的問題，而是必須建立一個包括共產黨，民主同盟等各民主黨派及愛國民主人士的，代表全人民利益的，真正民主的聯合政府。而台灣必須在這個聯合政府之下，實現完全以台人治台的民主自治，這是台灣人民的最正確的目標，而且是唯一的生路⁴⁸。（（新しい中国の連合政府は）ある党派が他の党派に代わって、またある個人が他の個人にとって代わって政治を行なうという問題ではなく、共産党と民主同盟などの各地の民主党派および愛国民主人士を含めて、全人民の利益を代表する眞の民主的な連合政府を樹立しなければならない、ということである。したがって、台湾はこの連合政府の下で完全に台湾人が台湾を統治するという民主的な自治を実現しなければならない。これは台湾人民の最も正しい目標であるばかりか、唯一の生きる道である。）

繰り返しになるが、謝の文章は殆ど他人が代筆することで出来たので、この時期の謝の人間関係から考えてみれば、この「明天的台灣」もおそらく楊克煌の手を経て完成したと推測できる。

以上の文章から見れば、謝が強調したいポイントは、まず、「全人民の利益を代表する眞の民主的な連合政府の樹立」、次に「台湾人が台湾を統治するという民主的な自治の実現」である。もちろんこれは、謝が共産主義を深く信じており、また当時中国共産党は一番「全人民の利益を代表する眞の民主的な連合政府の樹立」に近い勢力である、という認識を前提とする。

⁴⁸ 一斐「明天的台灣」、『新臺灣叢刊第三輯 明天的台灣』、香港：新臺灣出版社、1947年12月1日、P16-17。

「台湾民主自治同盟」が成立した後も、謝は依然としてこう主張している。



第二次国共内戦において、中国共産党の勝利を目にした謝は中国共産党に対して最大の期待をかけたのは当然のことであった。このような状況で、謝雪紅、楊克煌、蘇新らによって、「台湾民主自治同盟」（略称「台盟」）の設立準備会が 1947 年 11 月 12 日に成立し、1948 年 7 月 12 日に正式に成立した。主席は謝雪紅で、楊克煌と蘇新は理事を務める。この組織の役割は、台湾への中国国内の革命情勢の宣伝、国民党政権による台湾人への圧迫と搾取を世界各国と中国国内に暴くということなどがある。名前の通り、謝と台盟のメンバーたちは「民主」と「自治」の両立を求めていた⁴⁹。

台盟が提出した「民主」と「自治」の内容について、その「台湾民主自治同盟綱領」で次のように明記している。

一、省為地方自治最高單位，省與中央政府權限之劃分，採取均權主義，省得自制定省憲及選舉省長。（省は地方自治の最高単位である。省と中央政府は均權主義を採用して、権限を分割する。省は自ら省憲法を制定し、省長を選挙することができる。）

二、實行台灣省徹底的地方自治，省長、縣長、市長、區長、鎮長、鄉長，一律由人民直接選舉。（台湾省は徹底的な地方自治を実施しよ、省長、県長、市長、区長、鎮長、郷長は一律に人民が直接選挙する。）

三、省設省議會，縣設縣議會，市設市議會，為代表人民行使政權之機構。

⁴⁹ 古瑞雲『臺中的風雷』、台北市：人間、1990 年、P210。

(省には省議会を設け、県には県議会を設け、市には市議会を設け、人民を代表して政権を行使する機関とする。) ⁵⁰



中国共産党も確かに、一度に各党派による「民主聯合政府」の制度を提出したことがある。このことについて、1948年5月7日台灣民主自治同盟が発表した「告台灣同胞書」にも言及した。

中共中央最近發表紀念「五一」勞動節口號 其中第五條說：「各民主黨派、個人人民團體、各社會賢達，迅速召開政治協商會議，討論並實現召集人民大會，成立民主聯合政府！」（略）在這時候，中共中央發表了這個號召，正切合全國人民目前的要求，也正切合台灣全體人民的願望。無論任何政府的產生，必須建築在全國人民的共同意旨上，即必須能夠真正代表全國人民的利益⁵¹。（筆者訳：中共中央は最近五一労働節の記念宣言を発表した、その第五条は「各民主党派、各人民団体、社会的有識者は速やかに政治協商会議を開催し、人民代表大会の召集を討議してこれを実現し、民主連合政府を成立させよう。」⁵²である。（略）この時期に中共中央がこの宣言を発表したのは、まさに全国人民の当面の要求にこたえたものであり、また台灣人民全体の願望にも合致したものもある。どのような政府が誕生するにしても、全国人民の合意に基づいて樹立されなければなりません。）

⁵⁰ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P302。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P316。

⁵¹ 丁原英、張振鵠ら「台灣問題資料輯錄」、『近代史資料』、北京市：科学出版社、1954年第3期、P54-55。

⁵² 訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P336-338。



これも台盟の設立準備会が 1947 年 11 月に成立して以後、台盟が中共支持を公然と表明した最初の文書である⁵³。しかし、事実上、中国共産党は 1949 年 10 月中華人民共和国が建国以降、台湾の「高度自治」について、一切の承諾はしていない⁵⁴。

それにも関わらず、中国共産党の五一宣言を信頼した謝と台盟のメンバーたちは、香港会議⁵⁵の後、正式に中国共産党の配下に収められた。これ以降、謝も依然として、「高度の台湾自治」を堅守し、1949 年 9 月新政治協商会議で「処理台湾問題意見書」を提出し、再び前述の「告台湾同胞書」で挙げた「高度の台湾自治」を強調した。しかし、台盟は中国共産党に重視されることもなく、「処理台湾問題意見書」も返事さえもらえなかつた。

中共の立場はさておき、次は謝と台盟は何故「高度の台湾自治」を堅守していた理由を説明する。

1948 年 1 月 1 日刊行の『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』の中に、「自治與正統」⁵⁶という文章があった。この文章中で、ただ台湾自治の必要性を強調するだけではなく、台湾の高度自治の困難性とその理由をも指摘しているが、そ

⁵³ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009 年、P324。

⁵⁴ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009 年、P322。

⁵⁵ 香港会議。1948 年 6 月香港で、謝雪紅と彼女が主導する台盟、蔡孝乾と彼の台湾省工作委員会、李偉光の上海台湾同郷会、の三つ組織によって行われた会議。その目的は、当時台湾における共産党の地下工作の指導権問題と台湾革命の理論の再確認。その結果として、蔡は台湾に戻り地下工作を続け、謝は北京へ中国共産党が主導する政治協商会議を参加しに行くという。謝と台盟の「高度の台湾自治」の主張は早くもこの時期から中国共産党によって批判を受けた。

⁵⁶ 露紹「自治與正統」、『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』、香港：新台灣出版社、1948 年 1 月 1 日、P19-23。

の一番大きな理由は「中国正統」の觀念である。



這是脫胎於封建意識的觀念，是時時刻刻阻撓著中國政治改革的毒素。這種意識的東西是或多或少普遍隱藏於中國人腦筋裡面。(略)蓋正統觀念對於台灣的起碼態度就是：中國治台灣。換句話，台灣必受中國統治「光復」以來，官僚政府即本著這種觀念去統治台灣。官僚們用統治各省的同一觀念(自然地亦由假民主的妙論及假自治的官法等等)去統治台灣。詎不到五百日，就碰到二二八自治運動的反擊了。(略)當前國民黨政權正在沒落中。可是台灣真自治還是要靠台灣民眾自己去繼續二二八的實踐而取得的。因為中國的正統觀念不會因國民黨政權的崩潰而立刻消滅的。即使國民黨政權倒了，假定所謂聯合政府成立了，那個時候「中國治台灣」的正統觀念還是仍舊要驅使新中央政府派遣新的省主席去主持台灣的——那個時候，在台灣僅僅仍將是迎新送舊而已罷了！？(訳：(筆者註：中国正統概念は) 封建的な意識の觀念から生まれ、たえず中国における政治改革を阻害してきた毒素である。このような正統觀念は、多かれ少かれ中国人なら誰しもその頭の中に巢くっているものである(略)要するに、台灣に対する正統觀念の根本的な態度としては、中国が台灣を統治すべきだ、換言すれば台灣は必ず中国に統治されるべきだ、ということである。台灣の『祖国復帰』(筆者註：中国語では『光復』という。)以来、官僚政府はこうした觀念に基づいて台灣を統治してきたのである。官僚たちは中国大陸の各省を統治するのと同じ觀念(つまり、偽りの民主的な巧妙な理論と偽りの自治的な施策を用いて)台灣を統治してきたが、五百日も経たないうちに、思いがけず二二八事件という自治運動によって反撃

されるに至ったのである。(略) 今や国民党政権は没落の一途をたどっている。だが、台湾の眞の自治は台湾の民衆に依存して引き続き二二八事件の実践を継承することによってかち取られるのである。なぜなら、中国の正統観念は国民党政権が崩壊したからといって、ただちに消滅するものではないからである。たとえ国民党政権が打倒されても、またいわゆる連合政府が成立したとしても、その時にはやはり『中国が台湾を統治する』という正統観念が従来同様に踏襲されて、新中央政府は新たな省主席を派遣して台湾を統治させるであろう。その結果、台湾では単に省主席の顔ぶれが変わって新旧交代しただけにすぎないことになる⁵⁷。)

陳芳明は以上の引用文について、以下の通りに解説した。中国の優越感が存続する限り、台湾の自治が実現される日を迎えることは出来ず、旧政権にせよ、新政権にせよ単に支配者が交代しただけである。戦後初期に台湾人が国民党政府の統治下で陥った悲惨な苦境から、謝と台盟のメンバーたちはこの点に気づいた。故に、中共の軍隊が勝利への道を歩んでいた時、また台盟が中共との合作を緊密化していた時に、謝雪紅らは前述のような政治的警戒心を抱えていた。国民党統治下で差別され弾圧された悲惨な体験を繰り返さないために、謝雪紅らは台盟を結成した際に、彼らの経験や感想と期待をこれらの文章で強調した⁵⁸。

⁵⁷ 梁紹「自治與正統」、『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』、香港：新臺灣出版社、1948年1月1日、P22-23。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P320-322。

⁵⁸ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P305-308。

もう一步進んで言えば、謝と台盟メンバーたちは国民党政権による「再植民」を経験したので、その経験から、台湾を中共の二度目の再植民を防ぐため、以上の主張を提出した。さらに言うと、2015年の現在でも、中国国民党と中国共産党は依然として「中国正統」の概念を捨てることはできていない。1948年の謝雪紅らの心情は、もとより言うまでもないであろう。

再植民に対する抵抗と警戒心も謝の出身とは関係があると考えられる。謝は終始弱者の立場に立ち、強権と対抗している。日本も国民党も中共も、外来政権の差別を排除しなければ、台湾人は奴隸の苦境から逃れられない。しかし、謝が引用したレーニンの言葉の通り、謝は自分は「奴隸」であると知っても、抵抗を諦めなかつた。このような強靭な精神と動搖しない姿勢は、謝は疑いがなく革命家として生きていたことの何よりの証拠である。

第三節 中国共産党の弾圧と「台湾人無漢奸論」

謝の台湾「独立」から「自治」の姿勢への転換は、それは謝の妥協によって生じたものだと、批判をもたらした。これももつともよく議論される論点である。

今回の新政治協商会議の開催およびこの会議によって組織される中央人民政府の成立と中華人民共和国の成立とは、完全に全中国人民の意志と利益に基づいてもたらされたものであります。六百七十万人の台湾人民が三百余年にわたってオランダ・スペイン・清朝・日本などの異民族の侵略と抑圧に反抗し、また国民党反動派の封建的・買弁的支配に反抗し

て、流血の犠牲を伴う闘争を一貫して推進してきたのは、まさにこの目的のためにほかなりませんでした。全台灣省人民は、全国人民の民主統一戦線によって組織された中国人民政府協商会議を全面的に擁護し、やがて誕生する労働者階級が指導し労農同盟を基礎とする人民民主専政の中華人民共和国中央人民政府を全面的に支持するとともに、この中国人民政府協商会議の共同綱領に全面的に同意します。この共同綱領の中の一つ一つの条項はわれわれの利益を代表しています。したがって、われわれはこれを遵守しなければならないばかりではなく、この綱領を完全に実現するために、最後まで努力奮闘しなければなりません。とくにこの綱領草案第十二条に掲げられている『各級人民代表大会は人民が普通選挙によって成立させ、各級人民代表大会は各級人民政府を選出する』という規定に、われわれは非常に満足しています。台灣人民の政治的要求はまさにこの一ヵ条に集約されています。⁵⁹

陳芳明は、この「台灣民主自治同盟首席代表謝雪紅發言」を引用し、分析した。「擁護」、「支持」から「同意」という言葉への推移をみると、謝雪紅はすでに自己の「台灣に於ける高度自治」の主張と立場を徹底的に放棄している。その理由は、ただ共同綱領第十二条のという規定だけであった。この条文を除いて、台灣の経済的な内容や歴史的に残されていた未解決の問題などについては、謝は二度と触れようとはしなくなった。若いころからそなえていた謝の革命精神は殆ど失われてしまって、完全に中国共産党の政策の執行者となったと、

⁵⁹ 「台灣民主自治同盟首席代表謝雪紅發言」、『人民日報』、北平、1949年9月24日。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P382。

陳は述べている⁶⁰。

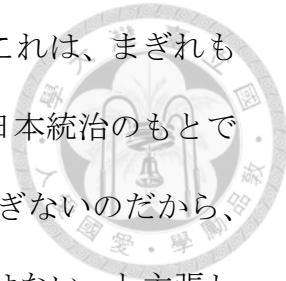


言い換えれば、陳の注目点は、謝の中国共産党との「妥協」、若しくは中国共産党に対する「服従」、その上、台湾共産党が政治大綱で強調した「台湾民族」の概念を諦め、「高度自治」の主張も諦め、台湾の所有権を中国共産党にしようとしたことである。この点から見れば、確かにそうであるが、謝の人生経験を前提として、謝のこの転換を考えてみれば、逆に謝の思想の中心となっていた点を強調したと考えられる。つまり、謝の中では、謝が共産主義を武器として使っていたように、「台湾独立」、「台湾の高度自治」そのものが目的ではなく、一定の目的を達成するための手段である。その故に、謝は転換した。この目的こそが、謝の思想の中心だと考えられる。ここではあえて触れずに、第二章のまとめの所で説明する。

謝の「台湾人無漢奸論」について、謝の署名のある文章にはないが、謝と関連する者たちの発言によって、謝の立場は記録された。

解放以後、彼女は職権を利用して資産階級右派の活動を推進し、日本統治時代や国民党支配時代に漢奸になった台湾人を自己の陣営に集結して、彼らが摘発されると彼らのために弁護した。北京、上海、広州で彼らを台盟に加入させ、彼らを登用した。彼らの一部の財産は、国民党によってさえ没収されてしまった。例えば、ある者は漢奸の行動をしていたが、解放後の人民政府に対し申請書を出して、われわれは台湾人だか

⁶⁰ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P373-374。



らその財産を没収するのは不当なことだ、と訴えた。これは、まぎれもなく典型的な『無漢奸論』であった。彼女は台湾人は日本統治のもとでは日本国民で、日本人の命令に従って行動したのにすぎないのだから、台湾人が戦犯になるはずはなく、また漢奸になるはずはない、と主張している。（略）したがって日本国民だったのだから台湾人には漢奸はいなかつたという謝雪紅の主張は、それこそ漢奸の立場に立っている。（略）彼女は資産階級の個人的野心家であり、実際には台湾独立の観点に立っている。『台湾人が台湾を統治する』とか、『台湾の領土は台湾が統治』とか、『台盟は台湾各階層人民の統一戦線の核心である』などといったスローガンは、いわゆる台湾は台湾人の台湾だ、ということである。だが、台湾は資産階級の台湾なのかどうか、それとも労働者・農民の台湾なのだろうか？彼女が台湾は台湾人の台湾で、省長・県長は台湾人がなるべきだなどと主張しているのは、表面的には台湾のために主張しているようにみえるが、実際は地主、資産階級の統治を主張しているにすぎない⁶¹。

陳炳基、吳克泰、蔡子民の三人は、謝とは敵対立場の蔡孝乾派の人で、彼らがこの発言をしたのは 1974 年で、謝が亡くなった 1970 年から、すでに 4 年が経過していた。

謝の『台湾人無漢奸論』とは、台湾人は日本の国民だったので、その価値

⁶¹ 林天雄、「訪陳炳基、吳克泰、蔡子民談二二八起義和謝雪紅事件」、『歐洲通訊』、Vol.13、1974 年 10 月。引用、訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998 年、P478-479。

觀は台湾人の歴史を判断の基準にするべき。香港時期から謝が提唱していた「高度自治」もしくは「台湾自治」は、中国共産党中央の角度から見れば、それは間違いなく「台湾独立」であり、つまり、中国共産党中央は台湾人の利益よりも、中国共産党の利益を最優先にするべきと考えている。自治の主張が原因で、謝は何度も中国共産党中央に批判され、もしくはこの引用文通り、政敵に「資産階級の支持者」と歪曲されたが、それでも謝は中国共産党ではなく、台湾人の利益を最優先にし、台湾人のために働いていた。

つまり、中国に渡り、中国共産党に支配されても、謝の中では、常に台湾を中心にして考えていて、圧倒的な少数者だとしても、弾圧を受けても、諦めなかった。

しかし、1950年代の「整風運動」から始め、一連の批判闘争によって中国共産党と蔡孝乾派の手によって、謝は失脚に向かわせられ、やがて1958年1月に謝は「第一期全国人民大会代表」と「台湾民主自治聯盟主席」のポストから解任され、党籍をも剥奪され、根底から中国共産党党内の政治立場を失った。

第四節 まとめ

謝の立場について、林瓊華は、「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」の一文において、陳芳明の研究には幾つかの問題があると指摘した。

まず、林が提出した陳の研究の問題をまとめる。その一つは、陳は自分自

身の台湾民族主義の出発点から、意図的に謝と中国共産党との歴史関係を否定したこと⁶²、もう一つは、謝を台湾独立主張者とみなすイメージである⁶³。

しかし、謝は中国共産党の紹介で上海大学に入学し、また、中共の推薦でモスクワに行った。さらに、台湾共産党は上海で中共の支援を得て成立したので、党员の多数も同時に中共党员である。その上、謝は『我的半生記』では「祖国」を「中国」を呼び、青島の経験では自ら漢民族の精神を自覚し⁶⁴、五・三〇事件で「台湾を取り戻す」とデモで主張した。二二八事件後、香港で発表した「告同胞書」も中国を「祖国」と呼んでいる——植民地時期の各政治路線の人たちが中国を祖国と認識していたことも事実である⁶⁵。

以上の事実を踏まえて、青島から上海大学に入学するまでの謝の政治思想はまだ具体的な理論があるとは言えないが、民族感情は間違いなく中国にあると、林は主張した⁶⁶。また、謝は1925年の五・三〇事件と1949年中国に入り、中共の指導を受けたあとも「台湾を取り戻す」を主張し続けたことから見れば、謝の立場は青年時代から中年まで一貫していて終始変わらなかった。そして、台湾共産党時期に謝と「改革同盟」との対立は、運動上の戦略の差異と個人的・感情の衝突で、階級や民族のアイデンティティによるものではない、つまり階級や民族のアイデンティティ問題において、謝と「改革同盟」は類似性、

⁶² 林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北県：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P158。

⁶³ 林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北県：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P164。

⁶⁴ 林瓊華「女革命者謝雪紅的『真理之旅』(1901-1970)」、『第六屆中華民國史專題論文及』、台北県：國史館、2002年、P83。謝雪紅口述、前掲書、『我的半生記』、P130。

⁶⁵ 林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北県：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P166-167。

⁶⁶ 林瓊華「女革命者謝雪紅的『真理之旅』(1901-1970)」、『第六屆中華民國史專題論文及』、台北県：國史館、2002年、P24。

もしくは同一性がある。そう林は示唆した⁶⁷。



確かに、謝は青島で漢民族のアイデンティティーを持つようになつた。すくなくとも 1960 年代末、中国共産党から激しい批判闘争を受けていた謝は『我的半生記』で、このように 1920 年代の自分の行動を解釈している。「民族自決」の概念に影響され、民族主義で帝国主義による搾取、圧迫の問題を解決しようとした社会運動者は当時には多数であった。謝もその例外ではない。しかし、林の主張の通り、上海大学に入学するまで謝の中では共産主義の理論はまだ乏しかった。本稿では第一章で、共産理論の乏しい謝は如何にロシアの留学経験で、少しつづ共産主義の理論を身につけ、自分の武器にしたと説明した。そうであれば、五・三〇事件の「台湾を取り戻す」と 1949 年以降の「台湾を取り戻す」というのは同じものだとは言い難い。

ロシア留学する前の謝は如何に「帝国主義」の問題を理解し、解決しようとしたのか。『我的半生記』ではこうした段落がある。

第一章第一節も書いた通り、1923 年 4、5 月の頃、当時上海にいた謝と林木順が見たのは帝国主義者の外国人たちが中国人に対する数々の侮辱である。例えば、公園での「華人と犬は入るべからず」の警告看板、外国人が人力車を乗る時に車夫の辯髪を手綱のように握り、左右の方向を指示したなどがある。その時、謝は「民族の立場」から非常な怒りを感じていた⁶⁸。

⁶⁷ 林瓊華「女革命者謝雪紅的『真理之旅』(1901-1970)」、『第六屆中華民國史專題論文及』、台北県：國史館、2002 年、P83。

⁶⁸ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004 年、P155。



また、1925年4、5月の杭州での経験について、こう記している。

孫文の追悼大会において、「台灣人」名義で弔聯を申し込むのか、それとも「福建人」の名義で申し込むのか、當時杭州にいた台灣青年たちはこのについてかなり悩んでいた。その理由は、日本の帝国主義者は台灣に対する統治を固めるため、台灣のチンピラを閩南に送り、彼らの犯罪行為を支援した。このような離間の政策で閩南人と台灣人の衝突を計り、大陸人が台灣人に対して嫌悪と怒りを買わせるようにした。そのため、台灣人がデモや会議に参加する時は自分は「台灣人」であると、名乗ることはなかなか出来なかった。しかし、自分は台灣人であると主張し、中国大陆の同胞たちに台灣人の善意と祖国に対する愛を知らせるべきであると、謝は敢えて主張した。謝の意見に対して他の台灣青年たちも納得し、その結果として、台灣人も段々大陸人に受け入れられて、特に福建人と台灣人の親睦と団結を促進した⁶⁹。

林が強調した通り、謝には確かに「漢民族意識」があるものの、以上の例が示したように、謝は台灣人としての立場を捨てることはなかった。もし、謝が民族主義に影響されていたと認めるとしても、謝も確かに「同じ漢民族である」福建人、閩南人、大陸人との親睦によって、台灣人が孤立させられていた問題点と異民族の支配とを、いずれも民族主義の方法で解決しようとしたことは否定出来ない。言い換えれば、台灣人と大陸人の親睦を同じ漢民族として強めることによって、異民族、帝国主義の日本に対する敵対意識を強調すること

⁶⁹ 謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004年、P171。

である。



もう一つ言及しなければならないことは、謝が『我的半生記』の内容を口述した背景である。謝は、1950年代の2度の批判闘争を受け、1958年の1、2月、台湾民主自治聯盟主席の職務が解除され、中国国民党党员の党籍も剥奪され、全国人民代表大会の出席資格も取り消された。そのあと、謝と楊は一種の隠居生活を強いられていたが、1966年8月からの文化大革命で、10月、謝は紅衛兵に住まいから追い出され、書籍、資料、ファイル、銀行通帳など、すべて取り上げられた。

さらに、1968年5月、謝は台盟指導者徐萌山の子と彼が率いた紅衛兵にまた家財を没収され、そのあと台盟總部まで強制的に連行された。謝はそこで、大衆の前で批判闘争・侮辱され、加えて暴力を振るわれた。台湾共産党時期に改革同盟派の王萬得もこれを機に、謝を気絶するまで殴り、また水をかけて謝を目覚めさせ、続けてひたすら暴力を振るった。当時謝は67歳だった⁷⁰。

それ以降、謝は1970年11月に北京の隆福病院で肺がんで病死するまで、体調を回復できなかった。その時、謝が残した遺言が三つある。「第一、私は右派ではない。第二、私は依然として共産党を擁護し、社会主義を擁護している。第三、私は生涯で誤りを犯したことがある。」謝が軍代表に遺言を伝えた後、楊克煌と二人だけになるとひそかに「どうか最後まで戦いぬいてください。

⁷⁰ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P514。

最後の勝利は台湾人のものですから。」と伝えた⁷¹。



以上は謝が『我的半生記』を口述した背景である。

謝は最後まで台湾自治の理想を諦めることはなかった。そのことは、陳芳明が『謝雪紅評伝』で十分証明した。時代背景を前提として考えてみれば、『我的半生記』の作成目的は二つあると推測できる。一つは、1950年代の二度の批判闘争で政敵こと蔡孝乾系統に右派だと中傷されたことに対して、そのため弁明と名誉挽回、もう一つは自分の人生において台湾人は如何に帝国主義に圧迫され続けてきたか、さらに台湾の特殊性をリアリティーのある方法で中共に表明することであった。その目的は勿論、謝の遺言の通り、彼女は終始共産主義の正当性を確信しており、その共産主義によつていつかは「台湾自治」が実現できるはず、という期待を捨てず、そのことを中共政府側に伝えることであった。「善意」のある言葉、例えば「祖国」などを使ったのは、そのためであったろう。

謝がこのような手法（共産主義による「台湾自治」の実現）を使ったのは、この遺言が初めてではない。楊克培の『台湾人民民族解放闘争小史』⁷²の序文でも、謝は「台湾は古来中国の神聖な領土であった」や「中国人民は必ず台湾を解放する」などという中共当局の政治スローガンを使っていた。しかし、注

⁷¹ 陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P544-545。

⁷² 楊克煌『台湾人民民族解放闘争小史』、台北市：海峽學術出版社、1990年10月。『台湾人民民族解放闘争小史』が中国で最初に出版されたのは1956年で、出版社は湖北人民出版社、著者は楊克煌。王曉波が劉國基からその1956年の原本を手に入れて、1999年に台湾で再出版したのが本書が台湾で出版された経緯である。本書の内容は主に、台湾人民が日本に反抗する歴史を中国歴史の一部にしようとした、また台湾は中国の領土であることを何度も強調した。

目すべき点は、謝自身が果たした自らの歴史的役割を評価させる意図がこの文章に秘められていたことである。例えば、「この『小史』は、その内容および資料が比較的豊富であり、具体的である。また本書は台湾におけるわれわれの先人の革命的実践によって創作してきた歴史、とりわけ無産階級政党がその成立以後台湾人民の闘争を指導してきた歴史を客観的に記録しているので、その意義は推して知るべしであろう。」と謝は述べていた。ここでわざわざ「無産階級政党」の果たした歴史的な役割を強調している理由は、勿論、それは謝自身の反抗の記録であるから、このように自己の政治活動を弁護していた⁷³。

これで何故中共の指導を受けた後、謝は「祖国」などの言葉を使っていた理由を説明できたはずである。何よりも、『我的半生記』の時代背景と謝自身の状況を合わせて考えてみれば、『我的半生記』この本の存在自体が、台湾解放に向けた謝の立場の証明であり、謝の「台湾アイデンティティー」の証明である。そしてこれもまた謝の遺言に繋がっている。

ここで、林瓊華が提出した「台湾を取り戻す」の一貫性について検討してみる。二二八事件以降、謝は中国共産党の勢力を借りて中国国民党に対抗するため、独立から自治へ転換したことはすでに説明した。要するに、共産主義の方法で台湾の問題を解決しようとしたのである。言い換えれば、謝の台湾立場、台湾解放（自治）の考え方は変わらなかつたのである。

1925年の五・三〇事件の「台湾を取り戻す」と1949年以降の「台湾を取り

⁷³ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P302。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P474。

戻す」を比べてみれば、両者の前提は全然違っており、その方法も違う。もし両者に「一貫性」があれば、それは謝は台湾の問題を解決しようとしていて、そのための違う方法による試みである。



故に、林瓊華の説で謝は「祖国」、「台湾を取り戻す」などの言葉を使っているとか、漢民族の精神とか、「民族感情は中国にある」とかというのも、確かに一理はあるが、決してそれだけではないだろう。

では、謝のアイデンティティーは一体どこにあるのか。

第一章で謝が共産主義を選んだ理由と、謝が如何に共産主義を通して自己の現実と台湾社会を理解し、そして共産主義の思想と方法を封建制度、帝国主義、植民政治に抵抗する武器にしていたか、その経過について説明した。しかし、第二章で示した通り、香港時期から、謝が選んだ「台湾独立」の路線は通用しなくなった。

謝の「独立」から「自治」への転換について、謝の台湾主張の核心はこの転換が問われたと同時に、核心そのものも浮かび上がってきた。

香港時期の謝の原則は変わらなかった。植民地時期に、「台湾独立」だけが台湾人を植民政府から解放させる唯一の道だと謝は思い、太平洋戦争が終わった後、中国国民党政権が台湾に入り、謝は再び共産主義を借用し、国民党政権とその背後にあったアメリカ帝国主義に抵抗し、台湾人を再植民から解放させ

ようとした。そのため、当時では中国国民党と敵対する立場に立った中国共産党の勢力は不可欠であると、謝は判断し、「台湾自治」を提出した。言い換えれば、形だけの「台湾独立」や「台湾自治」が謝の最終の目的ではなかったのである。

「台湾人が台湾を統治する」という台湾人の苦しみは台湾人しかわからないといった謝の思いや、共産主義路線に対する執着、などから見れば、謝の本当の抵抗しようとしていた対象は、階級、植民、封建などである。これらは謝が幼年期から戦ってきた対象で、これが謝の社会運動の原点である。そしてこの目的を果たすため、「台湾独立」が必要であり（日本植民地時代）、「台湾の高度自治」（香港時期以降）が必要であった。

そして、中国共産党から弾圧を受けていた「台湾人が台湾を統治する」、「台湾の領土は台湾が統治」の主張も、国民党政権による再植民の経験から生じたもので、中国共産党による二度目の再植民を防ぐための主張である。この主張から見れば、「台湾独立」から「台湾自治」への転換から見られるのは、「台湾独立」の放棄ではなく、むしろ帝国主義、封建制度、資本主義、中国正統概念のない台湾こそ、台湾の主体性が重視される台湾こそ、「台湾独立」、もしくは「台湾自治」の意義があり、事実上の「自由な台湾」になれる。そのとき始めて台湾人は本当の意味で植民と再植民から解放されると謝は考えていた。そしてこれは謝の「台湾アイデンティティ」の表れだと考えられる。

つまり、謝の台湾アイデンティティはこのように成立した。



非知識人の謝は、理論よりも目の前の現実を見つめて考える人であった。

底辺社会に生きる人達と台湾民衆の苦しみに対して、彼女は切実さをもって共感を抱いた。こうした立場から、謝は共産主義の道を選んだ。自分自身が体験した台湾人として背負わなければならない苦しみと底辺社会で見てきた現実は、生涯社会運動に従事していた謝の出発点であり、彼女の人生を通じて始終変わらない初心でもあった。謝の最も重要な目標は、苦しめられている台湾人を種々な圧迫から解放することであった。

そしてこれも謝が終始共産主義を信じていた理由である。晩年の謝は中国共産党から激しい批判闘争を受けてきたが、それでも共産主義は無産階級の唯一の突破口だと確信して、共産主義を信じ続けていたのである。

以上「台湾独立」の主張があり、「台湾の高度自治」の主張があり、さらに抵抗すべき対象と抵抗する方法を確認してきた。言い換えれば、謝の台湾アイデンティティーは抵抗の精神から生まれた。抵抗の精神、姿勢が存在する限り、謝の台湾アイデンティティーは存在する。つまり、「革命者」としての謝は台湾アイデンティティーから離れることはない。従って、謝の主張と立場は、台湾人の自覚と不離一体のように緊密に結びついている。

この点について、第三章の謝と男性知識人の比較してみれば、さらに謝の特殊性が浮き彫りになる。

では、林瓊華が主張している謝の「中国アイデンティティー」の問題について、一体どう解釈すればいいのか。



謝の「中国アイデンティティー」には2つの重要な前提がある。謝の民主中国と共産主義への執着、また台湾の高度自治主張から考えてみれば、その一つは、台湾も中国も自由、民主の状態、もう一つは、中国が台湾に対して「中国正統」の概念や台湾再植民の意図を持っていないことである。言い換えれば、謝の台湾アイデンティティーは「中国アイデンティティー」より優先していて、台湾を中国の枠組みの中に入れようとしていることではない。

以上で、謝のアイデンティティーについて説明してきた。もちろん、こうした主張は、中国共産党から見れば、間違いなく「台湾独立」そのものになるに違いない。

第三章 蔡培火と蘇新——謝雪紅から見る男性知識人

謝の立場は第一章と第二章で説明した。第三章は謝と同時期に社会運動に参加した男性知識人、蔡培火と蘇新を取り上げ、謝と比較する。



蔡培火は1889年5月22日に雲林北港に生まれ、父親蔡萬は書房の教師だったが早死した。その長兄蔡嘉培も漢学の素養があり、同じ書房教師の仕事で家族を養っていた。蔡は1910年に台湾総督府国語学校師範部を卒業し、1915年2月まで公学校で教師として働いていた。しかし板垣退助と林獻堂の台湾同化会に参加したため免職となり、同年2月林獻堂の支援を受け、東京に留学した。蔡は教育者を志願し、東京高等師範学校に入学した。入学しても政治活動を続け、1920年3月卒業し、同年洗礼を受け、7月に新民会の雑誌『台灣青年』を創刊した。それ以降、全力で台灣議会設置運動に身を投げ出した⁷⁴。

一方、蘇は1907年11月14日に臺南佳里に生まれ、父親と父親側の親戚は代々農民である。1914年、8歳で書房に入り、『三字経』と『四書』を学び、1916年4月公学校に入った。蘇は勉強熱心で、成績優秀、1922年15歳の時、学年主席で公学校を卒業した。同年4月、台南師範学校に入学したが、日本教師と日本学生による差別に反抗したため退学させられ、1924年に東京に渡り、1925年東京大成中学四年に編入、1927年に東京外国語学校に入学した。

当時、日本の共産主義運動はかなり活発で、蘇は日本人学生の紹介で中学の「社会科学研究会」に参加した後、すぐマルクス主義の研究に没頭するよう

⁷⁴ 張漢裕編『蔡培火全集(一)』台北市:財團法人吳三連臺灣史料基金會、2000年12月、P69-72。

になった。そして「東京台灣社会科学研究会」を作り、この動きは「台灣文化協会」と「台灣農民組合」の注目を集め、「台灣農民組合」もこの繋がりで「日本農民組合」と連絡を取るようになった。1927年の年末、蘇は日本『無產者新聞』の紹介で林木順と知り合いとなり、林の指導で「台灣社会科学研究会」のメンバー数人と「馬克思主義小組」を組織した。メンバーの陳來旺が代表として上海に台灣共產黨の創設大会に参加し、陳が東京に帰った後、この「馬克思主義小組」は「日本共產黨台灣民族東京特別支部」と改名した。これで、蘇は正式的に共產党員となつた⁷⁵。

以上、一見して蔡培火と蘇新の出身と経歴は類似性がある。二人とも書房で勉強したことがあり、その後、公学校、師範学校に入学、そしてまた東京に留学した。留学中西洋の思想に触れ、影響を受けた。これによって、それぞれ、もちろん謝も含めて、違う立場と姿勢で社会運動に参加し、それがそれぞれの問題を解決しようとした。

なお、第三章で取り上げる蔡培火と蘇新を例として考察してみれば、ここでいう「知識人」は少なくとも日本の新式教育、中等教育の学歴を持っている者を指す。もちろん、1895年前に生まれ、書房教育を受けていた林獻堂、蔡惠如など社会リーダー階層も知識人の範疇に入るが、彼らは実際に社会運動に参加するというよりも、資金を提供して社会運動をサポートし、その姿勢と行動は蔡、蘇のような若者とは違うので、本稿では取り上げていない。

⁷⁵ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P37-41。しかし、蘇新自ら書いた自伝では、年表に間違いがあり、黃文源は蘇新自伝と吳新榮の日記を対照して訂正した。詳細は黃文源「雙新記——論蘇新與吳新榮的「抵抗」之道」、『台灣史料研究』、Vol36、台北市：吳三連台灣史料基金會、2010年12月、P88-93。



第一節 大正デモクラシーと蔡培火の自治論

松尾尊児は、大正デモクラシーを三つの段階を分けてとらえた。第一段階は 1905 年—1913 年、第二段階は 1914 年—1918 年、第三段階は 1919 年—1925 年である。第一段階の主流思想は立憲主義、憲政主義（代表人物島田三郎、尾崎行雄）で、第二段階は民本主義、自由主義（代表人物吉野作造）、第三段階は社会主義、共産主義、国家主義（代表人物山川均、吉野作造）などの主張が同時に存在していた。それぞれの共通点は、明治維新以降、日本帝国主義と民主主義の矛盾への批判である⁷⁶。

1919 年朝鮮の三一独立運動に刺激され、各植民地の問題も次第に取り上げられたが、朝鮮、満州、中国と比べたら、台湾に関する論争は圧倒的に少ない。とは言え、植民地の問題が言論界で注目されるに連れて、植民地台湾に対して関心をよせた人も確かにいる。例えば、序章で説明した通り、泉哲、植村正久、田川大吉郎、神田正雄らがそうである。

泉哲は「台湾は總督府の台湾ではなく、台湾島民の台湾である」と主張した。台湾の統治方針は植民地本位にするべきで、経済と教育の改善は必要である。そうすれば社会地位と政治権利において、台湾人と内地人の差別もなくなる。日本は文明植民国として、植民地の人民の幸福を求めるにこゝ、文明植民策を取るべ

⁷⁶ 陳翠蓮、「大正民主與台灣留日學生」、『師大台灣史學報』、第 6 期、台北市：國立臺灣師範大學臺史所、2013 年 12 月、P61-62。

きだと考えていた。



植村正久はキリスト教の人類平等の精神を前提にし、台湾人の苦境に同情を寄せていた。植村は同化政策に反対することではなく、台湾人と内地人の協調、融合が最善の結果で、ただ、同化は自然の方法で行うべきであると考えていた。

田川大吉郎の主張も平等とキリスト教の神の人に対する愛を掲げ、内地人は内地人の台湾差別に直面して自省するべきだと呼びかけている。人は誰でも自由と平等を求めており、台湾人は圧迫されているから反抗している。そのため、請願運動は理解、同情されるべきで、また、台湾人も内地人も同じ大日本帝国の臣民として、共に内地と台湾の融合のため努力していくべきだと田川は主張していた。

神田正雄は大アジア主義の提唱者である。神田は五年間のヨーロッパ、アメリカでの生活経験で欧米による東洋人差別を感じ、東洋人の団結を主張していた。特に日本と中国の共同提携を重視し、台湾統治が順調に進んでいけば、中国の排日も緩和でき、そうすれば日華親善の実現も可能になる。神田も大日本主義者であり、植民地の拡張こそが日本の国力を向上する方法であると、彼は主張していた。しかし、植民地と内地の差別は確かに存在していて、これらの問題を解決するには、植民地人民の参政権は必要である。そうすれば植民地と内地の完全なる融合は実現し、日本民族の生存と繁栄も実現できる⁷⁷。

⁷⁷ 陳翠蓮「抵抗與屈從之外：以日治時期自治主義路線為主的探討」、『政治科學論叢』、Vol. 18、

以上の彼らの主張は当時日本で勉強していた台灣青年たちに借用され、台灣議会設置請願運動をはじめ、一連の自治運動の理論の裏付けとなつた。



まず、蔡培火は「我島と我等」で「我島は帝国南方の鎖鑰で、軍事上の重要地点である。我島の政治が多年の間武人によつて掌握されたのは、この點が剩り重く認められすぎた結果の禍ではないかと疑ふ。此の意味から考へて、我等は決して悠々閑々に、何時まで無能力者として立つていく理にはいかぬ。臺灣は帝國の臺灣であると同時に、我等臺灣人の臺灣である。」⁷⁸と宣言した。これは明らかに泉哲の主張の借用である。

そして「吾人の同化觀」の一文で、蔡培火は「同化」を自然の同化と人為の同化を分け、自然の同化はすでに世界の各文化の中に進んでいて、人類の生活も真善美の方向に向かって進歩し続けている。人為の同化は難しいが、幾つかの条件を備えれば出来ないでもない。「第一の條件としては自然的にその新領土が小さくて且つその舊母國から懸け離れてゐることである」、「第二の條件としては個性を尊重し善良なる文化を保障してやる舉に出ることである」、「第三の條件は異心同體的精神と態度を取ること」、「第四の條件は此の政策を政策として取らぬことである。平く言へば、新附民等に對して同化云々を云ひ振らさぬことである」。また、日本が台灣を統治してからすでに20年も経て、同化はスローガンのまま、例えば教育、人材採用、言葉、婚姻など各方面では實際の有効的な同化政策がない。「同化は決して征服の結果でない。征服のされた

台北市：國立臺灣大學政治學系、2003年6月、P152-155。

⁷⁸ 蔡培火「我島と我等」、『臺灣青年』、Vol-2、東京、1920年10月15日、P19。

との意識を持つところには、同化の美果が結ばれぬ筈のものであることを、我々は如何なる代償を拂うとも、大聲疾呼して、無謀者流の猛省を促す決心である。」⁷⁹



また、「日本々國民に與ふ」の一文で、割譲の最初、台灣人は「亡國とか、屈辱とか、はたまた被征服とかの感じは、我々多数の台灣島民には毛頭もない」が、日本の30年統治の後、台灣本島人が反抗するのは、実は植民政府当局の同化政策と圧迫によって生じたものだと、蔡は書いた⁸⁰。

そして「中日親善の要諦」と「東亜の子はかく思ふ」で日中親善の重要性を説き、また日中関係の悪化の要因を分析し、また具体的な解決策をも提出した。その一つは、「鮮臺統治策の根本的革新」である。

内地、朝鮮、臺灣は一家族の三人兄弟であつて、各々個性あり別個の立場がある。そしてその内地と云ふ兄貴が親の命を奉じて朝鮮臺灣と云ふ弟分をその一存で世話し使用してゐるやうな次第、そこで問題は、この兄弟間の関係と隣佑のこれに對する注目にある。幾年來此の内地たる兄貴は二人の弟分に個性を捨てろ、別個の立場あるも忘れて終へ、唯一つの残骸となつて、そして我が靈を受けてその發動のまゝに立働くと云抱負で指導命令に務めた。（略）隣佑の傍観は傍観だけで済めば幸、それを若し各自のことに結附けて考へられるやうでしたら如何でせう⁸¹。

⁷⁹ 蔡培火「吾人の同化觀」、『臺灣青年』、Vol-2、東京、1920年8月15日、P67-82。

⁸⁰ 蔡培火『日本々國民に與ふ』、東京：香柏社書店、1928年4月、P33-37。

⁸¹ 蔡培火「中日親善の要諦」、『臺灣青年』、Vol-2、東京、1921年8月15日、P55。



つまり、日中親善という前提で、植民地台湾の政策の改善は必要である。

以上で、蔡培火は如何に大正デモクラシーの日本言論界の台湾政策改善提唱者たちの理論を取り入れたのかを説明する。

しかし、台湾議会設置運動と大正デモクラシーからの理論の借用にも限界がある。詳しく言うと、台湾右翼の知識人（例えば蔡培火）が日本言論界の論述を借用すると同時に、自治運動も彼ら植民者の世界文明階層觀を取り入れた。そのため、植民統治の構造を壊すことができない⁸²。

以下は、蔡培火を例として、彼が提出した世界文明階層觀を取り上げる。

東西之文明，各有所長，然西洋文明，則出我東洋文明之上者遠矣。夫我東方文明，僅區在精神範圍之内，物界之研究，寥然代無可觀也。西方之文明，則不然，精神之上，還家有物質之穿鑿，且其考究之方法，不向我東方之雜然無序，別備一種論理的者，即所謂科學的方法是也。（略）蓋東亞之文明，蓋以主觀而集成者（略）若歐米文明，以主觀之察，又兼客觀之證，是心理作用之外，又重感觀之觀察（略）其文明之境，跨於心物之上，是精神物質兩全之精華也⁸³。（筆者訳：東西の文明、其々の長所があるが、西洋の文明は実に遙かに私達の東洋の文明より優れている。私達の東方文明はただ精神の領域だけにあり、物質の研究において、価値

⁸² 陳翠蓮『台灣人的抵抗與認同 1920-1950』、台北市：遠流出版公司、2008年8月、P73。

⁸³ 蔡培火「對內根本問題之一端」、『台灣青年』、Vol1-1、漢文之部、東京、P50-51。

のあるものはほとんどない。西洋の文明はそうではない。精神以上に、物質もある。その研究方法は私達東方のように乱雑ではなく、論理的で、いわゆる科学方法である。(略) 東アジアの文明は主觀の集まりである。だが欧米文明は主觀の観察がありながら、客觀の実証もある。心理的作用以外に、感官の観察もある。その文明の境界は、心物に上回って、精神と物質の両者を兼ねる精華である。)

蔡培火の視線では、西洋文明は東洋文明より遙かに優れていって、また、東洋文明内部にも優劣の別がある。

夫我台灣，係滄海中之孤島，住民不過三百五十萬，地偏而人少，遂致世界聲氣幾乎不通，社會風化不振 (略) 思念及此，吾人雖自稱為人類之一員，不亦羞愧之甚乎⁸⁴。(筆者訳：我が台湾、滄海の中の孤島であり、住民もわずか三百五十万、偏僻で人が少ない、そのため、世界の音声も通じず、社会の教育も不振のまま (略) そう思ったら、私たちは人類の一員と名乗るだけでも、恥ずかしいばかりだ。)

これだけではなく、台湾人の趣味も問題になっている。

趣味者，即追美之至情，與文明而並進者也。今觀我台人，則甚缺乏 (略) 憶吾人繼承四千余年之歷史，先人遺受之文物，亦有足以宣揚於中外，而因吾等趣味之低下若是，遂令家庭社會，盡屬乾燥無味，如一片不毛之荒

⁸⁴ 蔡培火「對內根本問題之一端」、『台灣青年』、Vol1-1、漢文之部、P46、東京。

野⁸⁵。（筆者訳：趣味と言うものは、即ち美を追求する至情であり、文明と並び、進むものである。今私たち台湾人は、趣味に乏しい。（略）私たち四千数百年の歴史を受け継いでいて、先人から受けた文物も中外に名をあげるに足りているのに、私たちの低俗で下品な趣味で、家庭も社会も退屈極まり、不毛の地のようである。）

それと対照的に、内地日本人の趣味は、実に高尚なものである。例えば家では挿花、茶道など優雅な研究があり、外では紅葉狩りなどがある。欧米人の趣味と言えば、さらに感服の至りである⁸⁶。

陳翠蓮の解釈によると、蔡培火が想像した世界文明階層は「西洋—日本—台湾」の三階級で、台湾は世界文明の最底辺である。⁸⁷。

『蔡培火全集（四）政治関係一戦後』の文章から見れば、戦後の蔡培火の立場はかなり複雑である。蔡は民族の対立から植民者日本の被植民者台湾への差別と搾取を強調した。これによって、中華民国、三民主義、中華民族の正統性を唱え、大陸部の領土奪還（いわゆる「反攻大陸」）、反台独などを主張した。蔡培火は国民党を賛美すると同時に、部分の文章でも「党國体制」の弊害を指摘し、本省人と外省人の隔たりを消去するなどの論点をあげた。もちろん、その目的はすべて中華民国の改造と強化のためである。ここでは、蘇新と対照するために、中華民族と中華民国、国民党三者の関係に注目する。

⁸⁵ 蔡培火「對內根本問題之一端」、『台灣青年』、Vol1-1、漢文之部、P50、東京。

⁸⁶ 蔡培火「對內根本問題之一端」、『台灣青年』、Vol1-1、漢文之部、P50、東京。

⁸⁷ 陳翠蓮『台灣人的抵抗與認同 1920-1950』、台北市：遠流出版公司、2008年8月、P73。



二二八事件の後、當時上海にいた蔡は「慰問紀要」の一文を記した。

因為二二八事件，全省各地各界的犧牲痛苦鉅大，台灣省黨部十分關切痛心，派出四個慰問團慰問各地。（略）我在這次慰問旅行，最感愉快，就是各地本省的同胞，對本黨的存在加了多大的認識與興趣。（略）各地的同胞，都在稱讚這次二十一師國軍的軍規嚴肅，人民都在感謝，對國軍的評判很好。（略）國內和平的問題 大家都是不大明瞭內亂的癥結何在（略）內亂的癥結，第一是在共產主義者想於政治上制霸的野心，第二是在政治經濟尚未上了軌道。（略）二二八事件已屬過去，而又是我們弟兄間自己的事情，要來懷怨誰呢？不過以台制台這確實不是愛護國家的思想⁸⁸。（筆者訳：二二八事件で、全省各地各界は大きな犠牲を払い、大きな苦痛を味わった。台灣省党部は十分の関心を寄せ、4つの慰問団を派遣した。（略）今回の慰問旅行で、一番嬉しいことは、各地の本省の同胞は本党の存在に対して、認識を深め、興味を寄せていた。各地の同胞は今回の二十一師の厳正な軍紀を賞賛し、深く感謝して、国軍に良い評価を与えた。（略）国内の平和の問題について、皆さんは内乱問題の核心は何なのか、よくわかっていない。（略）内乱問題の核心の一つ目は共産主義者の政治的野心、二つ目は政治、経済はまだ軌道に乗せていないためである。（略）二二八事件はすでに終わった。しかも、私達兄弟の間のことで、誰が誰を憎むのだろうか。しかし、以台制台（筆者註：台湾人が

⁸⁸ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P37-40。初出：蔡培火「慰問紀要」、『中華日報』、1947年6月18日。『中華日報』、1946年2月に台湾台南市で相關された台湾の地方紙。中国国民党の党営事業の一つである。

台湾を統治する）という言葉は確かに愛国思想ではない。）



この文章は、二二八事件に対して、中国国民党側の公式解釈とはほぼ同様である。事実上、2015年の現在でも、中国国民党は二二八事件をこう説明している。

台湾議会設置運動や台湾文化協会、『台湾青年』『台湾民報』など、数々の経験を持っている台湾社会運動の代表者の一人、蔡培火が二二八事件の二十一師による虐殺鎮圧のあと、中国国民党党員としてこの文章を書いた政治意義は、ただ中国国民党の自分の暴行への捏造した自己弁護しかなかった。そして、蔡は中国国民党党員として、その助けをした。

しかし、二二八事件の爆発は、最初から共産党や共産主義とは関係がない。1947年二二八事件が爆発した前、台湾の政治、経済の問題もただ「軌道に乗せていない」だけではない。この二つの問題は第二章の第一節すでに説明した。

そして何故蔡はこのような転換をしたのかというと、「為突破當前國家危局遂行本黨使命的鄙見」ではその一側面を捉えることができる。

本人向本省同胞的主張：本省同胞都是由中國大陸移來的，血統文化都是大陸的，不能與大陸分開而獨立。（略）少數人在主張台灣獨立，這是叛國忘祖的思想，為中華民國國民所共棄，絕無實現的可能！本人公然表明

反對！！又有部分同胞主張組織新黨，本人為期中華民國國基穩固力量集中，遂行反共復國，所以亦公然反對組織新黨。我們中華民國是民主自由的國家，若是在太平的時候，組織新黨是應該是自由的，不過我們要認識，中華民國現在不是太平，是非常時（略）必須反攻復國，是戰時，需要力量集中，組織新黨是會使力量分散，會危及國家，不是愛國行為，所以我公然反對⁸⁹。（筆者訳：私の本省同胞に対する主張：本省同胞は皆中国大陸からきた者である。血統も文化も大陸のものなので、大陸と別れて独立することができない。少数派の台湾独立の主張は國を裏切り、祖先を見捨てる思想なので、中華民国国民はこのような思想を非難し、台湾独立は決して実現することができない！私は公然と反対を表明する！！また、部分の同胞は新しい政党の設立を主張するが、私は中華民国国礎の安定と国力の集中、及び反共復國のため、新しい政党の設立をもまた公然と反対する。私達中華民国は民主自由な国家なので、もし平和の時ならば新しい政党の設立も自由のはずである。しかし、今の中華民国は平和の状態ではない、非常事態である。（略）今は反攻復國の戦時なので、力の集中は必要である。新しい政党の設立は力を分散させ、國を危機に陥らせるので、愛国的行为ではない。故に私は公然と反対する。）

本人向本黨中央的建議：（略）（1）國家至上，有中華民國才能團結，才有政黨，才有個人，才有一切。（2）國家需要力量，現局需要全民大團結，團結需要鞏固的中心，這中心除中國國民黨外，別無可求⁹⁰。（筆者訳：私

⁸⁹ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P351-352。期日：1978年12月30日。

⁹⁰ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、

が党に対する建言：（略）（1）国家至上、中華民国があるから團結できる。そして政党が存在し、個人が存在し、他のすべてが存在する。（2）國は力が必要である。今、国民全体の大團結は必要である。この團結もまた強固な中心が必要であり、この中心は中国国民党以外にない。）

以上の引用文以外に、蔡培火も「党国」概念と国民党による政治壟断を指摘し、民生や国家の建設は重視するべきなどの意見を提出した。これらの文章を材料として考えてみれば、戦後の蔡培火は依然として台湾の福祉に关心を寄せているが、ただ、蔡の中では台湾の福祉は中華民族と中華民国という前提がなければ実現できない。植民地時代の自治運動のように、台湾は日本の附属でなければならないように、台湾は中国、中華民族の附属でなければならないと蔡は再び強調した。しかも、これらの「福祉」は中華民国、中華民族のためなら妥協の出来るものである。

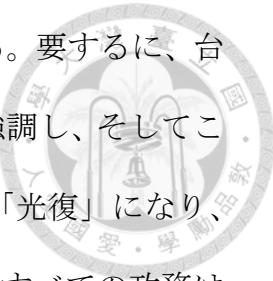
以上だけでなく、1951年10月16日『軍中文摘』⁹¹で、蔡の「總統六五華誕獻詞」⁹²を掲載した。その内容をまめると以下の通りになる。

蔣介石の65才の誕生日を祝う文章なので、文章の最初はまず中共とソ連を罵り、そして彼らと対抗する「蔣公」こと蔣介石を褒め称えていて、これらの

P352。初出期日：1978年12月30日。

⁹¹ 『軍中文摘』1950年6月1日に台湾台北で創刊した、軍人を主な読者とした雑誌である。小説、随筆、雑文、詩歌などのコラムがあり、軍人作家の紹介もある。出版者は國防部總政治部。

⁹² 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P410。初出：蔡培火「總統六五華誕獻詞」、『軍中文摘』、台北市：國防部總政治部、1951年10月13日。



段落が殆どである。それ以外に、最後にこのような内容がある。要するに、台灣は如何に日本の植民統治に苦しめられたのか、このことを強調し、そしてこれらの苦しみはすべて「蔣公」と国民党政権の助けによって「光復」になり、自由になった。また、今年地方自治が実施され、これによってすべての政務は民意に基づいて遂行される体制となった。これらはすべて「蔣公」の功績だという。故に、台灣人は「蔣公」の御恩を知るべきであり、報いるべきであると述べている。また、「蔣公」の部下の中、徳も素行もよくない人が沢山いて、幹部は全員反省するべきである。さらに自分は不才ながらも、熱い思いで自分の総てを捧げて君子を追随し、「蔣公」の重荷を分担することを願う⁹³。

『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』の政論部分の文章では、その後の「一元獻機祝壽」⁹⁴（1951年10月26日）、「慶祝台灣光復二十年」⁹⁵（1966年10月25日）などの文章も大抵同じような内容が繰り返されている。

蔡培火の中華民国肯定、国民党政権賛美の態度は晩年までも変わらず、蔡は83才の高齢で「台灣第二十七回光復節感言」（1972年10月25日）、86才で「故總統蔣公與台灣光復的前因後果」（1975年4月）、91才で「發揚自強勝利精神慶祝建國70週年」（1981年1月1日）で、これらの文章を発表した。80才以上の高齢でこれらの文章が出来たかどうかの問題はともかく、この年

⁹³ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P411-412。初出：蔡培火「總統六五華誕獻詞」、『軍中文摘』、台北市：國防部總政治部、1951年10月13日。

⁹⁴ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P413-415。初出：蔡培火「一元獻機祝壽」、『民力月刊』、1951年10月26日。

⁹⁵ 張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係一戰後』台北市：吳三連臺灣史料基金會、2000年、P437-439。初出：蔡培火「慶祝台灣光復二十年」、1966年10月25日。

齡で、また蔡の名前でこれらの文章を発表したことの意味、目的は何なのか、
考えるべきである。蔡の国民党内のキャリヤはすでに確定していた。言い換え
れば、知識人としての蔡培火は相当な意味で、国民党政権の看板として利用さ
れたと推測できる。そして蔡自身もこのような行為を黙認したのである。

また、内容について、1949年5月20日「台湾省戒厳令」が布告されてから
1987年7月14日に解嚴するまで、台湾の言論の自由、集会・結社の自由は38
年2ヶ月も犠牲にされた。さらに、白色テロ時期に全島の人権は中国国民党に
よって蹂躪、侵害されていた事実を知りながら、それでも、蔡は中華民国は民
主自由な国家であると主張し、国民党、蔣氏政権を擁護していた。しかも、國
民党の反対者の迫害に加担していた。

晩年の蔡培火について、彭明敏⁹⁶は『逃亡』の一書で深刻な批判を記した。

淡水工商管理專科學校（現為真理大學）由台灣基督長老教會所設立，家
姊彭淑媛因為在雙連教會長久熱心服務，擔任長老多年，故受聘為該校創
校校長。（略）自從我被釋放之後，當局開始更加以施壓，要強迫她辭職。
該校董事會董事長蔡培火卻與國民黨勾結，對她橫加壓力和騷擾。我逃離
台灣後國民黨的態度更蠻橫起來。董事會接到通知，如果家姊不自動辭職，
教育部就要下令解散董事會。她只好於1970年12月離開淡水工商學校。

⁹⁶ 彭明敏。1923年8月15日、台中に生まれ、彭の一家は祖父の代から敬虔なキリスト教徒である。東京帝国大学政治科に留学したことがあり、日本敗戦後、1948年に台湾へ帰って国立台湾大学政治系に入学した。在学中、二二八事件を経験し、父親が国民党軍に逮捕されたことに深く影響された。34才で台湾大学政治系教授になった彭は政治主張のため、白色テロ時代に迫害され、1970年1月にアメリカに逃亡した。その後、彭は自分の白色テロ経験と逃亡後の生活を記し、『逃亡』の一書を書き上げた。

蔡培火是一位極端虛榮、偽善，阿諛權勢的機會主義者。他被任命為行政院政務委員後，得意忘形，在教會公開場合，怕別人不知道他地位的崇高，刻意說明：「我這政務委員就等於是日本的大臣，你們知不知道。」我的事件發生後，當局不擇手段逼迫我姊姊離職時，他完全與國民黨配合，以許多令人不齒的言論和卑劣行動來迫害她。（筆者訳：淡水工商管理專科學校（今の真理大学）は台灣キリスト長老教会によって設立された。私の姉彭淑媛は雙連教會で長年熱心的に活動をしているので、長老の任を努めていた。その故、淡水工商管理專科學校の創立校長として招聘された。（略）私が釈放された後、当局の圧迫はさらにひどくなり、姉は辞任を強いられた。当の学校の理事会の理事長蔡培火は国民党と結託し、姉にプレッシャーを掛けて嫌がらせをした。私が釈放された後、国民党の行動はさらに横暴になった。姉が辞任しなければ教育部は強制的に理事会を解散させるという脅迫が理事会に届いた。姉は仕方がなく、1970年12月に辞任した。蔡培火は大威張りで、偽善で、権力に媚びる日見主義者である。彼が行政院政務委員に任命された時、悪乗りをし、教会の公衆の目の前で、自分の地位の崇高さを見せびらかした。彼はわざとこう説明した「私のこの行政院政務委員、日本では大臣ですよ、あなたたち分かる？」私の事件が起きた後、当局は手段を選ばず姉に辞任を迫った時、彼は完全的に国民党に協力し、下劣な言論と卑怯な行動で彼女を迫害した。）

晩年の蔡培火がどういう人物であったか、十分に理解できる。蔡はただ、文章で国民党政権を擁護していただけではなく、現実生活でも国民党の白色テ

口の協力者であった。



以上を合わせて言えば、蔡培火も蘇新と同じく、蔡の中には、「中国優越」意識と「台湾の脱主体化」概念が存在している。そして蔡の場合では、両者が結合し、「中華民国こそ真の中国であり、中国国民党こそ中華民国の正統なる統治者である。」という「党国混同」（中国語では「黨國不分」と言い、党と国の概念が一体化していて、両者を分けないという意味である。）の概念になつた。

第二節 謝雪紅と蘇新の衝突

1929年4月、蘇新は東京から台湾へ帰り、まず力を入れたのは、台湾各地の鉱山労働者やきこりの労働運動である。労働者に組合概念の宣伝と組合創設の手伝いなどは、蘇当時の任務で、1929年4月から合計約2年間、蘇は宜蘭の太平山と基隆の二箇所で労働運動の宣伝と指導をした。

1930年10月、謝が主催した松山会議では、謝と後日「改革同盟」と呼ばれる台湾共産党内の男性知識人集団（主に中国留学と日本留学の二つのグループ）の衝突が表面化した。蘇新もその中の一人である。

両方の衝突について、表面的には共産運動の戦略や方針の違いにより生じたものである。1929年11月、謝の主導によって、新台湾文化協会（左翼化した台湾文化協会）の指導者連温卿は新文協から除名され、新文協の指導権も台湾共産党にある。そして新文協の存続問題について、謝は引き続き新文協を台

湾共産党の所属組織として働かせて、農民組合と同じように、台湾共産党の拡張のため働くべきであると主張した。その理由として、第一章の第三節にも言及したが、謝の考えでは植民地台湾の各階級はそれぞれ違うレベルの圧迫を受けているため、連合戦線の策略を取った方が勝算が高い。しかし、王萬得らの「上大派」（上海大学留学生系統）の考えでは、今こそ労働運動を全面的に左翼化する時期で、新文協の存在はそれを妨害するため、新文協は解散しなければならない。そして上大派がこのように主張する理由は、中国の情勢を直接に台湾に投影したため、台湾の労働運動に対して、過度の楽観を抱いていた⁹⁷。そしてこのような相異によって、王萬得と潘欽信の上大派と蘇新が改革同盟の協力関係を結んだ。

しかし、果たして改革同盟の謝に対する敵意は、ただ戦略上の違いによつて生じものだろうか。1930年の6月、謝は林日高を連絡員として上海に派遣するのと同時に、上海にいた翁澤生はまた連絡員を派遣して謝と連絡をとらせ、二人の優秀な労働者を派遣してウラジヴォストークで開催されるプロフィンテルン（赤色労働組合インターナショナル、コミニテルンがモスクワで創設された労働組合の世界組織）第五回大会に参加させるよう、謝に指示した。そこで謝は陳徳興と林朝宗を選出して会議に出席させることにしたが、林は途中から台湾に引き返し、陳は7月に上海に到着した。つまり、この時期に、台湾共産党は林日高と陳徳興の二人をそれぞれ別々に代表として中国に派遣したことになる⁹⁸。

⁹⁷ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P118-119。

⁹⁸ 陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P113。

しかし、翁澤生は明らかに林日高に対してそっけなく、極めて冷たいそぶりを見せた。そしてまた、翁澤生は林日高に「近いうちに連絡員を台湾に派遣し、その際指示も持たせることになっているので、あなたは一足先に帰るよう」と、一言だけで、林日高を帰らせた⁹⁹。ちなみに、当時の林日高は謝とは同じく台湾共産党の指導者の立場に立っていたが、今回の連絡は失敗したため、台湾に帰った後また謝に皮肉な言葉を言われて、挫折の中で林日高は脱党した¹⁰⁰。

では、翁澤生が言ったその連絡員は誰なのか。この人はおそらく親改革同盟派の陳徳興である。蘇新の自伝に、この事の記録がある。

要するに、1930年陳徳興が上海から台湾に帰ったあと、蘇新に、台湾党は右傾化日和見主義と閑門主義の誤りを正さなければならない、群衆による日常生活の闘争から大衆を糾合し、党の基礎はこうした方法でしか確立できないと伝えた。また、自分は謝を説得しようとしたが、謝は受け入れられなかった。そのため、もし謝は過去の誤りを認めないならば、王萬得、趙港、蘇新に相談し、党内で党の改造を行うと蘇は陳の伝言から翁の指示を知った。そして1931年1月に、改革同盟が結成、王萬得、趙港、蘇新ら5人が委員となった¹⁰¹。

2月、潘欽信が代表として『告台湾共産主義者書』などの書物を持って台湾へ帰り、王萬得、蘇新ら改革同盟のメンバーを集め、上海の指示を伝えた。しかし潘欽信も、翁澤生の指示は党の内部に別のグループを作ることではなく、

⁹⁹ 陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P114。

¹⁰⁰ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P121。

¹⁰¹ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P46-47。

大衆の組織と闘争を展開し、一般党員のレベルを高めて、大会で下から上に向かって批判して党を改造すると、改革同盟の誤りを指摘し、同盟を解散させた。

¹⁰²。



そして大会の準備が進んで、次は、大会のメンバーリストが問題になった。蘇の記録によると、謝たちは絶対的な少数派なので、彼らも大会を参加する必要があると蘇は述べたが、謝たちは絶対自分の誤りを認めないので、彼らが参加しても何の問題も解決できない、それだけではなく、今後の党の方針を彼らに知らされたら、きっと仕事の妨害になると、王萬得と潘欽信が答えた。

つまり、改革同盟派、主に王萬得と潘欽信は党内でグループを作ってはルール違反だと知つていながら、謝たちを大会から外した。そして、1931年5月「台湾共産党第二次大会」で謝雪紅、楊克培、楊克煌は党籍を剥奪された。代わりに、王萬得、潘欽信、蘇新が常務委員となり、三人で「書記局」を構成し、王萬得は書記、潘欽信は組織部長、蘇新は宣伝部長という、台湾共産党の新しい中央が確立した¹⁰³。

つまり、すくなくとも蘇新の記録では、潘欽信が上海から帰った後、一連の動きでは、謝と楊は完全に排除された。謝派と改革同盟は戦略上で衝突があることは確かだが、謝から党中央の立場と権力を奪ったのも確かである¹⁰⁴。しかし、その理由は何だろうか。

¹⁰² 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P47-48。

¹⁰³ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P48。

¹⁰⁴ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P116-131。



大会で可決した議案について、陳芳明は一つの問題を提出した。「謝たちの除名」以外に、「改革同盟の解散」、「党の機関誌の発行」、「新しい政治テーマの作成」などがあり、その中に「中国共産党の友情的なアドバイスを受け入れ、挨拶状を送る」という項目がある¹⁰⁵。台湾共産党の正式名称は「日本共産党台湾民族支部」であって、つまり台湾共産党の正式の指導権は日本共産党にあって、中国共産党はあくまで補佐である。政治大綱の中も「台湾民族」の存在を前提としている¹⁰⁶。なのに改革同盟派は何故、中国共産党の「友情」を受け入れて、「同民族」の内部党員を除名したのか。台湾共産党内部の民族問題と階級問題の矛盾と衝突についてはまだ更なる分析が必要である¹⁰⁷。

以上の記録と上海読書会事件の後、蔡孝乾、洪朝宗、潘欽信、謝玉葉（翁澤生の妻）は逃亡、任務放棄のため、謝に党から除名された事実、さらに、蔡孝乾、潘欽信、王萬得は元々中国共産党党員という、以上の事実を合わせて見れば、これは単なる策略の違いによる内紛ではない。個人の恨みも含まれていて、特に、第二章のまとめも書いた通り、王萬得は文化大革命まで謝に対して深い恨みを抱えている。それでは、改革同盟派の男性知識人は謝に対してどう思っていたのか、また、両者はどこが違うのか、これらの問題について、蘇新の視点は欠かせない。蘇新の視点を通じて、謝と台湾共産党内部の男性知識人の衝突の一側面が捉えられるはずである。

¹⁰⁵ 陳芳明『殖民地台灣 左翼政治運動史論』、台北市：麥田出版、2006年、P154。

¹⁰⁶ 台湾総督府警務局編、吳密察解題『台湾総督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942年、P593-602。

¹⁰⁷ 陳芳明『殖民地台灣 左翼政治運動史論』、台北市：麥田出版、2006年、P155。

以上で、蘇新を取り上げる理由と蘇新視点の重要性、及び蘇新の代表性を説明する。本稿が引用した文章もほぼ戦後に書かれたものなので、戦前の蘇新について、戦後の蘇新はこう解釈していると、自己弁護の可能性も考えなければならない、という前提としての考察である。

前述の通り、少年時代の蘇新は台南師範学校を退学させられたことがある。学校の中に、日本人学生と台湾学生の対立がひどくてよく喧嘩していたが、日本人教師は大体日本人学生を庇う。日本人教師は台湾人学生を差別していて、このような行動は台湾人学生の反感を買い、台湾人学生はよく不服を唱え、反抗的姿勢を取った。蘇新は級長なので、このような揉め事があれば、大体蘇新の責任になり、さらに、一部の日本人学生は蘇新が唆したと濡れ衣を着せようとした。

我從這個時候起，就開始痛恨日人學生的「民族優越感」和日人教師對台人學生的「民族歧視」。第二是常看到日人警察打罵台灣人老百姓，認為太沒有道理 太野蠻；又看到台灣來的日本人什麼都比台灣人高一等，如日本人教師的薪水比台灣人教師多，日本人學生的津貼九元，台灣人學生的津貼只有六元等。第三是，當時台灣已有一個群眾團體「台灣文化協會」，到處開講演會，進行啟蒙運動。（略）受了這些刺激和影響，就開始思考「日本帝國主義為什麼統治台灣」和「台灣人民的前途」等問題。這可以說是我的「民族意識」和「反對日本帝國主義的萌芽」。在這樣的情況下，在學校發生了一件事情。第三年級的時候，因一個台灣人學生對日人教師有些不禮貌的行為，被教師毆打，引起全班學生的罷

課，結果我也在內，一共被開除了十多名。（略）（筆者註：當時）還沒
有認識到台灣怎樣才能得到解放，只以為台灣人沒有教育，沒有文化，
所以才會受到壓迫。因此，就想以教育來救出台灣人民¹⁰⁸。（筆者訳：私
はこの時期から、日本人学生の「民族優越感」と日本人教師の「民族
差別」を非常に憎んでいる。第二、日本人警察官はよく台灣庶民に対
して暴力を振る舞い、罵り、極めて不合理で野蛮である。しかも、台
湾に来た日本人は何よりも台灣人より一段上で、例えば、日本人教師
の給料は台灣人教師の給料より高く、日本人学生の補助金は九元なの
に台灣人学生の補助金はわずか六元など。第三、當時台灣は群衆団体
「台灣文化協會」があり、あちこち講演会を開催し、啓蒙運動を行っ
た。（略）これらの刺激と影響を受けて、私は「何故日本帝国主義は台
湾を統治している」や「台灣人民の行き先」などの問題を考え始めた。
これは私の「民族意識」と「反日本帝国主義の芽生え」と言えるので
しょう。このような状況で、三年生の時、一人の台灣学生が日本人教
師に対して無礼な行動を取ったので、教師に殴られ、そしてクラスの
ストライキになった。私を含めて、合計十数人の学生は退学処分とな
った。（略）（筆者註：當時）私はどうすれば台灣は解放されるのかを
意識できず、ただ、台灣人は無教育、無文化なので、圧迫されると思
っていた。なので、教育で台灣人民を救おうとした。）

蘇新は蔡培火と同じ、「台灣の無文化」に悩んでいて、この問題を解決する
ために、それぞれの方法を見つけて、理論を学び、そして「教育」に目をつけ

¹⁰⁸ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P38-39。（文集で
の日付：1952年）

た。ここで言う「教育」は「学校教育」に限らず、文筆活動に通じて「台灣の文化、文明」を高めることも含めている。



到東京後（略）志願是想將來讀大學文學系，當新聞記者或文學家。認為，當新聞記者比較自由，不會受壓迫，又可以寫文章做啟蒙運動，教育台灣人民。（略）（筆者註：考進東京外國語學校英文學系後）當時我雖然參加了社會科學研究會，參加了學生運動，仍然想將來要做新聞記者或文學家。（筆者訳：東京についたら（略）将来、大学に入ったら、文学を専攻したい、卒業したらジャーナリストや文学家になりたい。ジャーナリストの仕事は比較的に自由で、圧迫されることも少ない。文章を書いて啓蒙運動に参加し、台灣人民を教育する¹⁰⁹。（略）（東京外國語学校英語専攻に合格後）當時私は社会科学研究会や学生運動に参加したが、将来は変わらずジャーナリストや文学家になりたい。）

また、戦後も、

一九四五年八月十五日，日本投降了。（略）被日本統治了五十多年，今天終於能夠脫離日本了，但這並不是台灣人民自己爭取過來的，今後台灣不知道會變成怎麼樣？我自己呢？自己還是向「文化界」或「學界」這一方面發展自己的前途¹¹⁰。（筆者訳：一九四五年八月十五日、日本は降伏した。（略）五十数年も日本に統治され、やっと日本から離脱する

¹⁰⁹ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P39-40。（文集での日付：1952年）

¹¹⁰ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P60。（文集での日付：1952年）

ことができる。しかしこれは台湾人民自身の働きの結果ではない、今度の台湾はどうなるのだろう？私はどうすればいい？やっぱり「文化界」や「学会」を目指す。)



結局、蘇新はジャーナリストも文学家もなれなかつたが、生涯文筆活動に身を捧げ、雑誌や新聞の編集者として社会問題を批判し続けていた。この点について、蘇新と蔡培火も似ていて、二人共雑誌や新聞で積極的に活動を展開した。

1928年7、8月、王敏川の誘いで東京で新文協の機関誌『台灣大衆時報』の編集長をつとめ、戦後、1945年10月陳逸松の誘いで王白淵、陳逢源ら、「ジャーナリスト、編集、工場の経理、銀行の職員など、上層の知識人」と「台灣政治經濟研究会」を組織し、雑誌『政經報』を発行、12月まで編集長を務めた¹¹¹。その後すぐ宋斐如、鄭明祿らと『人民導報』を創刊、同じく編集長として働いていた。しかし、中国国民党の弾圧で、1946年5、6月に辞任させられた。それから1946年の後半に『台灣評論』で編集をつとめ、『自由報』を創刊、5、6月に文化団体「台灣文化協進会」を創設、1947年の二二八事件までその機関誌の『日文時事』と『台灣文化』の編集を務めた。

蘇新も蔡培火も自ら知識人と自任し、自分は知識人として「台灣文化」と「啓蒙」の責任があつて、政治批判をしながら文筆活動で社会運動を参加した。蘇はこうして「上層の知識人」とよく交流し、労働者の視点から漸次離れていく

¹¹¹ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P60-62。（文集での日付：1952年）

く。



戦後から二二八事件まで、蘇新の思想状態は『政經報』でその一側面を捉えられる。

「論人事問題」で中国国民党に対する期待と失望を語った。人事問題について、中国国民党は、台湾人なのに日本人に協力して台湾人を虐待した「奸党」こと「台湾人警察官」や「御用紳士」、日本人官吏などを解雇せずに続けて雇用することに、蘇新は怒りを感じた。しかし、同時に、蘇新も幾つかの解決法を提出し、中国国民党に対する期待を見せ、自分と読者を励ました¹¹²。

米価高騰の問題について、蘇新も文章を書いた。当時、五人家族の一ヶ月の米代は少なくとも 700 元の高価になった。当局は「管理糧食臨時辦法」を公表し、米の配給制を実施するようになったが、一体配給を受けていたのは何人がいるのだろうかと、蘇は疑った。この「臨時辦法」は食糧問題を全く解決できず、むしろ事態をさらに悪化させるだけだと、蘇は指摘した。「当局は決して不純な動機でこの『臨時辦法』を実施したと私たちは固く信じている。長官（陳儀）が赴任した当日、飛行機から降りた途端すぐ、省民の皆さんのお腹をすかせることはないと保障したことは何よりの証拠である。」では、何故このようなことがあったのか、それは「日本人陰謀家の話を信じ、騙された」と弁解した¹¹³。

¹¹² 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993 年、P152-158。初出：『政經報』、vol1-3、1945 年 11 月 25 日。

¹¹³ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993 年、P159-162。初出：



これらの文章では、蘇新の中国国民党に対する期待と信頼が見られる。以上の文章以外に、「主義・機構・人物」¹¹⁴、「『内地』と『内地人』」¹¹⁵など文章で、日本人を「異民族」と呼び、いわゆる「外省人」に対して、「同胞」、「兄弟」と呼んでいる。言い換えれば、この時期の蘇新の中国国民党に対する信頼感は「同民族」意識から生じたものである。さらに、『憤怒的台灣』では随所に「国家民族」、「祖国」などの言葉を使い、「中華民族」の意識が見られる。

蘇新の中国国民党に対する期待と信頼は、蘇が「三民主義青年団」に参加した事から見ることができる。

不知道蔣介石的法西斯統治的台灣人民，當初都以為台灣真正解放了，政治運動可以自由了，於是各地成立了許多大大小小的團體（略）甚至誤認「三青團」為真正三民主義的青年組織，而許多青年都加入了它。他們的目標是模糊地標榜：協助新台灣的建設，促進台灣地方自治的實現，擔負起過渡時期地方治安的維持，三民主義的研究和對一般群眾的民主思想的啟蒙教育等等。（略）可是這些團體的領導者之中，多抱有政治野心（略）或利用混亂的過渡時期，爭取各種利權（略）但是，也有不少真正出於愛國、愛民族的熱忱，努力普及國語，和展開政治教育的活動¹¹⁶。（筆者訳：蔣介石のファシズム統治の知らない台灣人民は台灣は本当に解放され、

『政經報』、vol2-1、1946年1月10日。

¹¹⁴ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P163-165。初出：『政經報』、vol2-3、1946年1月10日。

¹¹⁵ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P175-176。初出：『新新』月刊、1947年新年号。

¹¹⁶ 蘇新『憤怒的台灣』、台北市：時報文化、1993年、P38-39。

政治活動も自由になったと思った。そのため各地で大小さまざまな団体が創設された。(略)さらに、「三青団」は本当の三民主義の青年組織だと誤解し、多くの青年は参加した。彼らの目標は、新台灣の建設の手伝い、台灣自治実現の促進、過渡期の地方治安の維持、三民主義の研究、一般民衆に対する民主思想の啓蒙教育など漠然と標榜していた。(略)しかし、これらの団体の主導者の中に、政治的な野望を抱えている人が多く(略)もしくは混乱な過渡期を利用して、各種の利権を手に入れようとした。(略)でも、その中に、愛國、愛民族の真心から、国語の普及や政治教育の活動に参加する人も少なくない。)

ここで蘇が書いた「愛國、愛民族の真心から、国語の普及や政治教育の活動に参加する人」というのは彼自身のことであると推測できる。しかし、これらの期待と信頼はすべて、二二八事件の後、絶望と失望に変わっていた。この『憤怒的台灣』の出版とその内容がその何よりの証拠である。

1947年7月13日蘇新が香港に到着したあと、謝とは同じ廖文毅の「託管論」¹¹⁷を反対するため、しばらく協力関係を結んだ。蘇は雑誌『新台灣』の編集として再び文筆、宣伝活動に戻った。そして1948年7月正式に中国共産党党員になり、1949年3月『憤怒的台灣』が出版され、以降、蘇新の民族主義の傾向はさらに顕著になっていった。

¹¹⁷ 廖文毅の「託管論」。廖文毅の「信託統治下の自治」というものは、極めて簡潔に説明すると、国際連合の信託統治の下自治を行い、台灣独立という最終的な目標の達成を目指すことがある。陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P284-286。

蘇と謝の和解は長く続かなかった。約 1949 年後半から 1950 年前半までの出来事である。



(筆者註：1949 年 10 月 1 日中華人民共和国建国）外交部的亞洲司需要一個日本科的科長，找不到人。那時候周總理當外交部長，任命我當日本科科長（略）可惜出任日本科科長的事，因謝雪紅極力反對而未成。對這點，她大概是驚，她沒有本事，她一個女孩子，也無讀冊，也無受什麼教育，在工作能力、專業能力方面要勝過我，當然是不可能的。但是，在共產黨的環境下把她造成什麼主席，大家都可以接受，這是另外一個問題，並不是說她有什麼能力。我可以當日本科的科長，她要當什麼日本科的科長呢？這是不可能的。再說我能當中央統戰部研究室的一個組長，她能當什麼呢？她是可以當個臺盟的主席，公開出來講幾句話，這樣子而已。¹¹⁸

(筆者訳：外交部のアジア部門は日本科の科長が必要だったが、適任者が見つからなかった。あの時周総理は外交部長で、私を日本科科長に任命した。（略）惜しいことに、日本科科長のことは謝雪紅の反対で台無しになった。このことについて、彼女は多分怯えているのだろう。女の子一人で、実力もない、教育を受けたこともほとんどない、仕事の能力、専門能力などで私に勝つなど、あり得ない。しかし、共産党という環境の下に、彼女をなにかの主席にすることはまた別の問題で、皆納得している。彼女が何かの能力を持っていることではない。私は日本科科長にかなうが、彼女は日本科科長になれるのか？私は中央統戦部研究室の組長にかなうが、彼女はなになれるのか。台盟の主席になり、人前に顔

¹¹⁸ 蘇新口述、葉芸芸整理「蘇新回憶錄」、『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993 年、P90-91。（口述の時間は明記されていないが、葉は「亡くなる直前」と書いた。）

を出して一言二言を言うのはできるけど、それだけだ。)



謝はどのような理由で反対したのか、今のところ的確な証拠がない、ただ、蘇新の視点から見れば彼はそう思っている。実は、蘇新だけではなく、張深切も似たような記録を残した¹¹⁹。当時の男性知識人の中、謝には、「女一人」、「駆け落ち妾」、「教育を受けたことがない」というイメージがあったの確かである。蘇新すらそう思っているなら、他の台湾共産党男性党員はなおさらである。つまり、改革同盟の謝に仕掛けた権力闘争の問題について、それはただ運動方針の違いによるものではなく、1928年蔡孝乾、潘欽信らが逃亡、任務放棄のため、謝に党から除名された恨み以外に、「無知識、無教育の女が自分より上に立つことがどうしても耐えられない」という男性中心、知識人中心の考え方があり、裏に働いていた。彼らは、少なとく蘇新は共産党党員として、共産主義の「教育」を受けて、「勉強」もしているが、しかしこのような性別の問題で自分自身の矛盾をみずから暴露している。以上の文章で暴き出されたのは、男性中心の思想のみならず、知識人の優越感と台湾社会運動において性別意識不足の伝統が残っていたことも明かになった。

蘇新の中華民族主義の問題に戻る。

最晩年の蘇新の政治主張は「關於「台獨」問題」の一文に見られる。文章の最後で1980年5月5日の作成期日が付けられ、蘇新は1981年11月に北京で亡くなつたので、「關於「台獨」問題」は確かに、最晩年の蘇新の文章であ

¹¹⁹ 陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009年、P42-43。張深切『里程碑』、台北市：文經、1998年。

る。



文章の冒頭で、蘇新は「宗主国」という言葉を使い、台湾と中国の関係を明示した。

台灣是日本的殖民地，日本人是統治民族，台灣人是被統治民族。（略）

當時的台灣，階級矛盾和民族矛盾，兩相比較，民族矛盾是主要矛盾。當年，我們是這樣分析台灣社會的¹²⁰。（筆者訳：台灣は日本の植民地で、日本人は統治民族であり、台灣人は被統治民族である。当時の台湾において、階級矛盾と民族矛盾を比べれば、民族矛盾は主な矛盾である。当時、私達はそう台湾社会を分析した。）

ここで言う「当時」は改革同盟のことを指しているのだろう。蘇がこの結論に辿り着いたのも、台南師範学校の経験と繋がりがあるはず。

當時的所謂「獨立」當然是指「脫離日本帝國主義的統治」，自己成為「獨立的國家」。當年第三國際領導下的任何殖民地的革命鬥爭都是採取這種方針的。至於「獨立」以後，怎麼辦？第一個綱領是提出「建立台灣共和國」。第二個綱領是提出「建立工農民主獨裁的蘇維埃政權」（此時，大陸瑞金已有中央蘇區）。（略）當年，我們只能考慮到這一點，至於以後怎麼辦？那就要看全世界尤其是中國革命的發展來決定了。（略）當時提出「打倒日本帝國主義」，脫離日本的統治，是對的。但主張「台灣獨立」是不

¹²⁰ 蘇新「關於「台獨」問題」、『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P265。（文集での日付：1980年5月5日）



¹²¹ 蘇新「關於「台獨」問題」、『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P265-266。（文集での日付：1980年5月5日）

ト政府」と同じの制度にした（二つ目の綱領）。これはとても重要なポイントである。)



以上は改革同盟の政治立場の説明と言えるのだろう。つまり、改革同盟が「台湾共産党第二次大会」を開く理由について、一つとても重要な政治目的がある、それは「台湾を中国に返却する」の手順である。そしてこのことが順調に進むために、台湾共産党中央は蔡孝乾、潘欽信、王萬得らの中国共産党党员に掌握されなければならない。しかし、引用文に書いた通り、コミニテルンの方針によれば、植民地は植民統治から離脱した後は独立するべきだが、改革同盟の予想では「独立」した後も「中国に返却する」。言い換えれば、改革同盟はただ共産主義という方法を、自分の中華民族主義のために動かせているだけである。

當前的台灣社會，很顯然跟五十年前完全不同。（略）資產階級的代表蔣政權統治著台灣。官僚雖然大部分是大陸籍人，但他們也是中國人，是中華民族 並不是什麼別的民族 所以主要矛盾是階級矛盾，不是民族矛盾。

「台獨」各派有一個共同的、最大的錯誤，就是把國民黨人當作外來的異民族侵略者，把大陸的人稱為「中國人」、「中國民族」、「中華民族」，把原來的台灣人稱為「台灣民族」，故意製造一種民族矛盾，把台灣的革命鬥爭說成是「反對外來侵略的民族獨立運動」¹²²。（今の台湾社会は、明らかに 50 年前とは全然違う。（略）資產階級の代表、蔣政權が台湾を統

¹²² 蘇新「關於「台獨」問題」、『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993 年、P266-267。（文集での日付：1980 年 5 月 5 日）

治している。官僚の大部分は大陸人だが、彼らも中国人であり、中華民族である。他の民族ではない。なので、主な矛盾は階級矛盾で、民族矛盾ではない。「台独」の各系統は一つの同じの、最大の過ちを犯している。それは国民党人を外来の異民族の侵略者だと見なしていることである。大陸の人を「中国人」、「中国民族」、「中華民族」と称し、元の台湾人を「台湾民族」と呼んでいる。わざと、一種の民族矛盾を作り、台湾の革命闘争を「反外来侵略の民族独立運動」と歪曲した。)

台灣問題是世界上最複雜的問題之一，是國內問題，又是國際問題。「台獨」的先生們把複雜的問題簡單化了。他們最大的錯誤是：(一) 他們把台灣和大陸孤立起來，不懂大陸的歷史，也不懂台灣的歷史，更不懂台灣的歷史和大陸的歷史的關係。特別是，不了解血統是構成民族的決定性因素，也是產生民族感情的最決定性的東西。(略) 台灣應不應獨立，能不能獨立，決定因素是今天的國際國內的現實的政治鬥爭(不是那些空洞的理論)。其中最重要的因素有兩條：(1) 台灣獨立對台灣人民有利還是不利(對國家，對整個民族，有利還是不利)；(2) 台灣獨立有沒有具備這個條件。我們的回答是：(1) 台灣獨立，對台灣人民不利(當然對民族，對整個中國，都不利)；(2) 沒有具備條件，因為首先多數台灣人民不同意，祖國人民不答應，中國政府不允許，世界上沒有一個國家會承認「台灣國」¹²³。(筆者訳：台湾問題は世界中最も複雜な問題の一つである。国内問題でありながら、また國際問題でもある。「台独」の先生たちは

¹²³ 蘇新「關於「台獨」問題」、『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P294-295。(文集での日付：1980年5月5日)

複雑な問題を簡単化した。彼らの最も大きな誤りは：（一）彼らは台湾と大陸をそれぞれ孤立させた。大陸の歴史が分からぬ、台湾の歴史も分からぬ、さらに、台湾の歴史と大陸の歴史の関係がわからぬ。特に、血統は民族を構成する決定的な要素だとわかつてゐない。それは民族感情を育む最も決定的なものである。（略）台湾は独立するべきではない。独立できるかどうかを決められるのは、今日国際、国内の現実的な政治闘争（空しい理論ではない）である。その中に最も必要な要素が二つある：（1）台湾独立は台湾人民に対して、有利なのか、不利なのか。（国家、民族全体に対して有利なのか、不利なのか。）；（2）台湾独立の條件は備えているかどうか。私達の返事は：（1）台湾独立は台湾人民に対して不利である。（もちろん、民族、中国全体に対して不利である。）（2）條件は備わっていない、まず大多数の台湾人民は同意しない、祖国の人民も同意しない、さらに、中国政府は許さない。世界中「台湾国」を認める国家は一つもない。）

以上の引用文で、蘇は「中華民族論」を前に出して、蔣政権と台湾人民とは階級問題で、民族問題ではないと強調した。しかし、中国優越意識を持ってゐる中国政府も、台湾人に対して、ただもう一つの統治階級であると、蘇は理解していない。「中国優越」と「台湾の脱主体化（desubjectification）」の問題は現実では解決されていない、この文章も解決法を提出していない。この問題は「同民族」だから自動的に解消するはずがない。もちろん、それも「血縁関係の中華民族」は本当に存在しているという前提が成立する場合の話である。

ここで、謝雪紅と比較してみれば、蘇には階級意識不足の問題がみられる。蘇は底辺社会の経験がないため、圧迫された者の気持ちに対して共感を欠いていると考えられる。換言すれば、「階級」よりも、蘇は「民族」に関心を寄せている。

歴史問題について、蘇の考えでは、台湾は「中華民族」の枠組みの中にこそ、「中国歴史」に合致する。「歴史」の「習慣」に合致しなければ、民族にも、中国にも不利なので、台湾にも不利である。しかし、何故台湾独立は台湾人民に対して不利であり、民族、中国全体に対しても不利であるのか、これ以上詳しい説明がない。

「關於「台獨」問題」の一文は、少年蘇新の師範学校の経験とは好対照である。蘇新は日本人学生の「民族優越感」と日本教師の「民族差別」を非常に憎んでいて、それから民族主義の方法で台湾の苦境を解決しようとした。そして最晩年の蘇新が辿り着いたのは中華民族主義の路線である。しかし、蘇新は中華民族主義と日本帝国主義の共通点、すなわち「台湾の脱主体化」という点に気付かなかった。56年探り続けてきながら、蘇新は自分の初心が一番嫌っていた路線に戻ってしまったのである。

蘇新の中華民族論の主張は終始一貫している。少なくとも、蘇が1952年に残した自伝と1980年5月5日に彼が残したこの文章、「關於「台獨」問題」を繋げてみれば、以上の結論が出てくる。帝国主義に抵抗するため、社会運動に身を投げ出した蘇新が、結局最後に帝国主義の支持者となつた。



しかし、蔡培火と同じく、72才の高齢の蘇新が中共内部において、その地位も定着している中で、この文章を発表した意味、目的はいったい何なのか、疑問である。

1980年7月、蘇新は台盟のメンバーを率いて日本へ日本在住海外中国人の懇親会に参加した¹²⁴。これは、ある意味で中共の蘇新への「ご褒美」だと考えられる。では、1980年5月に発表したこの「關於「台獨」問題」もこの「ご褒美」と何か関係があるのではないかと、感じられる。つまり、「關於「台獨」問題」はただ蘇新の名前を借りて発表したもの可能性がある。もしそうだとしても、蘇新も蔡培火と同じく、このような内容、行為を彼は黙認したのである。

例えこの推測は事実ではなく、「關於「台獨」問題」は確かに蘇新自身の文章だとしても、蘇新も蔡培火と同じ、「中国優越」意識と「台湾の脱主体化」概念は存在している。ただ、違う主張によって包み隠されているだけだし、またさらに多くの文章を書いて自分を弁護しようとした。

第三節　まとめ

同じ西洋の説を借用し、自らの武器にしても、謝が共産主義という武器で反植民、反帝国主義の姿勢をとったのとは、蔡も蘇もその違いがとてもはつきりとする。また蔡の自治説は日本と「同化」するのか、それとも日本から「離

¹²⁴ 蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年、P373。

脱」するのか、その姿勢はかなり曖昧である。つまり、少なくとも、右翼の請願運動では「抗日」と日本人としての権利を求む「親日」の境界線は非常に判断し難いところである¹²⁵。



そうだとすれば、謝の角度から見れば、勿論、蔡の主張に同意するわけにはいかない。例え自治運動が成功しても、帝国主義、植民制度、もしくは封建制度、階級問題、資本主義など、自治運動には何の問題も解決できずにいた。蔡培火にしても、当時の右翼知識人も、底辺社会の苦しみに対して、切実さのある理解は欠けていた。

また、同じ「自治」という名称を使っているが、謝の「自治」の目的は植民と帝国主義からの離脱で、蔡、もしくは請願運動の「自治」は実質的に植民制度を認め、帝国主義の下に「事実としてのより良い生活」を求めていながら、日本政府の弾圧に対して、再三譲歩した。しかし謝も蔡も、「自治」主張は失敗した。この二人の例から見れば、ただ外来勢力に対して、強権に「自治」を要求するならば、実現する可能性は低い。

また、ポストコロニアル理論家 Albert Memmi が植民者と被植民者と関係を分析する時、植民者は被植民者の種々のマイナスイメージを作り、その植民統治の正当性を固める傾向があると、彼は指摘した。もし、被植民者がこのよう

¹²⁵ 小熊英二「「異身同體」之夢」『近代化與殖民 日治台灣社會史研究文集』、台北市：台大出版中心、2012年4月、P277-278。

な落後で愚鈍なイデオロギーを納得したら、それは植民者との権力関係の中に押し付けられた役割を認めたことと同様である¹²⁶。



蔡と蘇の二人の男性知識人は、二人共台湾の「無文化」「無教育」に悩んでいた。そのため、自分は知識人として、「無文化」「無教育」な台湾人を導き、教育する責任ある。その問題を解決するため、それぞれの方法、理論を学んだが、底辺社会、最弱者に対して切実さのある共感が乏しい。そのため、階級よりも民族を問題にしていて、民族問題により多くの注意を払った。

被植民者意識はこのように蔡と蘇の中に働いている。

さらに、蘇の中に、謝はまさにその「無文化」「無教育」な台湾人のイメージが付きまとってそれを拭い去ることはできなかった。このような「無教育」の人が自分の上に立つことにどうしても耐えられなかった。謝の存在を通じて、蘇新の男性優越意識、知識人優越意識が浮かび上がり、さらに、「台湾自治」「台湾自主」を終始堅守している謝と比べたら、蘇と蔡の被植民者意識の強さが再び浮かび上がってくる。

彼らは最初に被植民者として不平を感じ、そして社会運動に身を投げ出したが、蔡と蘇の晩年から考えてみれば、彼らは最後に強権に妥協した。例え前述で引用した文章は自分の手で書いたものではなくても、彼らは文章の内容と自分の看板扱いを黙認した。そして国民党と中共の立場から見れば、知識人と

¹²⁶ 陳翠蓮『台灣人的抵抗與認同 1920-1950』、台北市：遠流出版公司、2008年8月、P75。

して強権に妥協した蔡と蘇には利用価値があり、妥協しなかった謝は利用価値はない、だから中共は簡単に謝を捨てた。



蔡と蘇の行動は、まさに第二章第二節で引用した梶紹の「自治與正統」で批判した通り、「中国の正統觀念は国民党政権が崩壊したからといって、ただちに消滅するものではないからである。たとえ国民党政権が打倒されても、またいわゆる連合政府が成立したとしても、その時にはやはり『中国が台湾を統治する』という正統觀念が従来同様に踏襲され（略）その結果、台湾では単に省主席の顔ぶれが変わって新旧交代しただけにすぎないことになる。」¹²⁷とうことになる。

しかし、知識人の社会運動路線にも彼らなりの価値がある。知識人だからこそ、紙面の文筆活動ができ、歴史研究の素材をたくさん残した。さらに、右翼も知識人も、社会活動の多様性を保つことには非常に重要である。台湾共産党と台湾文化協会の経験から見れば、非合法の左翼運動が潰された時に、反抗の精神は引き続き右翼運動の存続と共に引き継がれて、また次の世代へと希望を託すこともできた。

¹²⁷ 梶紹「自治與正統」、『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』、香港：新台灣出版社、1948年1月1日、P22-23。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998年、P320-322。

結章

謝雪紅は自身の底辺社会経験から、台湾人が向き合っていた封建制度、男性優越主義、帝国主義、資本主義の諸問題に気づいた。また、「米騒動」から「五四運動」まで一連の事件を通じて、階級の存在が認識され、反抗の可能性を見つけた。換言すれば、今まで自分自身の不幸は「運命」ではなく、社会制度の問題だと気付き、自分の人生の主導権を取り戻すことも可能であると、謝は気づいたのである。

そしてロシアで謝は共産主義という方法を学び、日本クラスのクラスメートとの衝突でこの方法で解決した。これは謝雪紅の人生において、とても重要な突破である。

台湾へ帰った後も、謝雪紅も引き続き共産主義を武器として使っていた。台湾農民組合の三つの提綱が示した通り、謝は自身の経験から出発し、共産主義の思想で自分の境遇を理解、分析して、台湾の困難を解決しようとした。

謝は自分自身の経験を通じて、封建制度における女性の複雑な立場を認識したので、女性の問題はただ性別の問題ではなく、台湾人全体の問題でもある。また封建制度と帝国主義こそ台湾人を苦しめてきた原因であると謝は理解した。植民地台湾の各階層はそれぞれ違うレベルの圧迫を受けているため、この点において、各階層の立場は台湾人としては、同じである。

この認識も謝の社会運動の姿勢に反映している。労働者運動、共産主義の

方針について、新文協を解散させるよりも、農民組合と同じように、新文協を台湾共産党の拡張のため働かせるべきである。この連合戦線の考え方も、謝の経験と関係があると考えられる。換言すれば、謝の中には常に多重の圧迫を受けている台湾人の影があり、これこそが謝の抵抗の原動力であると考えられる。

そして国民党の再植民と二二八事件の打撃を受けても、謝は抵抗を諦めなかつた。中国に渡り、香港で台湾民主自治聯盟を結成した謝は今度、中国共産党の勢力を借りて、国民党政権とその背後にあるアメリカ帝国主義に対抗しようとした。再植民の経験を経て、謝と台盟のメンバーたちははつきりと知っている。「中国正統」の概念が存在する限り、「台湾独立」も「台湾自治」も形ばかりの形式だけで、本質は依然として何も変わらず、ただ統治者の顔ぶれが変わつて新旧交代しただけにすぎないことになる。

故に、中共の内部においても、謝は抵抗を諦めず、「台湾自治」の理想を諦めなかつた。しかし、謝が終始堅守してきた「台湾自治」や「台湾人無漢奸論」が表した台湾中心の考え方は、中共の弾圧をもたらした。そして中共の政治中心から駆逐され、結局、非道な弾圧を受けることになった。

それでも謝は妥協することはなかつた。「どうか最後まで戦いぬいてください。最後の勝利は台湾人のものですから。」という遺言の通り、謝は最後まで台湾を諦めなかつたのである。

封建制度の象徴とも言える養母の虐待に対して、謝は諦めなかつた。日本

帝国主義と日本クラスのクラスメートの差別に対して、謝は諦めなかった。国民党政権のさらなる残酷に対して、謝は諦めなかった。中共の弾圧と裏切りに直面しても、謝は諦めなかった。



謝は最初から最後まで抵抗の精神を貫いた。謝がいつも思っているのは、総ての力と方法を尽くし、自分自身と台湾人に降りかかった重すぎる圧迫にどこまでも抵抗することであった。

謝が引用したレーニンの言葉の通り、謝は自分が奴隸であるとわかつても、抵抗を諦めなかった。このような強靭な精神と動搖しない姿勢は、謝は疑いがなく革命家として生きていたことの何よりの証拠である。そしてこうした抵抗の姿勢の中で、謝は抵抗すべき対象と抵抗する方法を確認した。それは、台湾人の真の自由を手に入れるために、「中国正統概念」を排除しなければならない、ということであった。

言い換えれば、謝の台湾アイデンティティーは抵抗の精神から生まれた。抵抗の精神、姿勢さえ存在すれば、謝の台湾アイデンティティーは存在する。故に、革命者としての謝は台湾アイデンティティーから離れることができない。また、謝の主張と立場は台湾人と緊密的に結びついている。

謝の特殊性は、蔡培火と蘇新との比較でさらに強調された。

蔡と蘇の晩年の行動は、まさに第二章第二節で引用した梶紹の「自治與正

統』で批判した通り、「中国の正統観念は国民党政権が崩壊したからといって、ただちに消滅するものではないからである。たとえ国民党政権が打倒されても、またいわゆる連合政府が成立したとしても、その時にはやはり『中国が台湾を統治する』という正統観念が従来同様に踏襲され（略）その結果、台湾では単に省主席の顔ぶれが変わって新旧交代しただけにすぎないことになる。」¹²⁸とうことになる。

彼らは最初に被植民者として不平を感じ、そして社会運動に身を投げ出したが、彼らは最後に中国国民党、中国共産党などの強権に妥協し、自分自身の初心を裏切り、自分の初心が一番嫌っていた強権の共犯者となった。そして国民党と中共の立場から見れば、知識人として強権に妥協した蔡と蘇は利用価値があるが、妥協しなかった謝には利用価値はなかった。だから中共は簡単に謝を捨てた。

蔡と蘇と比べれば、謝が本当の革命者であることは明白である。謝は女性問題において、「女性は革命を参加すべき」だと主張している。本名もペンネームも、台共や台盟の代表としての宣言以外に、謝が自ら文章を発表することは極めて少ないが、その中に三つも「女性は革命に参加すべき」だと強調している。

謝が起草した 1928 年の台湾農民組合婦女部の提綱ではこう書いていた。

¹²⁸ 梁紹「自治與正統」、『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』、香港：新臺灣出版社、1948 年 1 月 1 日、P22-23。訳文：陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社会評論社、1998 年、P320-322。



臺灣婦女は已に覺醒し来れり。故に臺灣婦女は自らを解放するが為に無產階級運動に参加し、その指導下に團結せざるべからず。換言すれば婦女運動は即ち無產階級運動の一部隊たるべし。(略) 我等の臺灣の婦女姊妹よ！我等が一切の敵人に向つて進攻せんとすれば、須らく我等無產農工婦女は起つて整然たる綱領と政策とを以て組織を持つべし。斯くて始めて我等婦女を重壓しつつある傳統的惡制度と我等を欺瞞せる階級に対し勇敢に闘争するを得ん¹²⁹。

また、1930年7月26日、『台灣新民報』第323號で、謝雪紅の「組織の力で自由を奪還する 幾何か良い生活が出来る」を掲載した。政治参与、労働、工資、教育などの不平等に対して、謝は述べた。

斯様な事情は台灣婦女解放運動の根本原因であるが、この耐へ切れない原因と各国婦女解放運動に促進され刺激され、一斉立つて運動開始の機運に遭遇しなければたらぬ。一旦大聲疾呼すれば、台灣に風雲を捲き起さざるを得ない。十年後になれば組織的になり、有機的になり少とも運動の結果多少合理的な生活を享受し得る。即ち政治的、經濟的、社会的の自由の要求が一部奪還されるものと見て差支へないと思ふ¹³⁰。

そして謝がペンネーム「斐英」で発表した「一個台灣婦女的申訴」でもこ

¹²⁹ 台湾總督府警務局編、吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌』、台北市：南天、1933-1942年、P1074。

¹³⁰ 謝雪紅談「組織の力で自由を奪還する 幾何か良い生活が出来る」、台北：『台灣新民報』第323號、1930年7月26日。

うした段落がある。



婦女為了自身的解放，必須自身起來爭取，更加須要參加全人民的爭取中國的獨立、和平、民主的新的革命，直到這革命達到勝利以後，婦女們才會得到真實的解放¹³¹。（筆者役：婦女は自分自身の解放のため、自ら立ち上がりなければならない。さらに、中国の独立、平和、民主の全人民の新革命に参加しなければならない。この革命が勝利に辿り着いたら、婦女たちは眞の解放を手に入れる。）

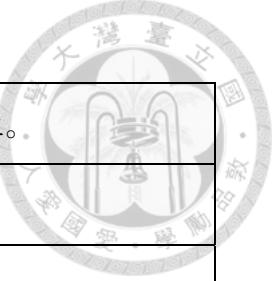
以上の引用文が示した通り、謝は終始革命者として生きていて、また、このように台湾の女性は革命に参加するべきだと説得しようとしていた。

理論を操る知識人と比べれば、謝の言葉は率直で素朴なものであった。しかし、だからこそ、謝は初心を守り切ることができた。

謝こそが本当の革命者であり、その抵抗し続けてきた「諦めることを知らない精神」は今の臺灣にこそ必要とされている。脱植民化がまだ完成していない今、私たちは謝の精神を身につけなければならない。

¹³¹ 斐英「一個台灣婦女的申訴」、『新臺灣叢刊第二輯 勝利割台灣』、香港：新臺灣出版社、1947年11月1日、P29。

年表



1901年10月17日	謝阿女（後に謝雪紅に改名）が生まれた。
1917年	張樹敏と結婚
1923年4-5月	林木順と知り合う。
1925年5月	五・三〇事件が爆発。
1925年6月	謝が上海大学に入学。
1925年9月	モスクワへ向かう。1925年の冬に東方勤労者共産大学に入学。
1927年11月	謝と林が上海へ戻る。
1928年4月15日	日本共産党台湾民族支部（台湾共産党）建党大会。
1928年4月25日	上海読書会事件。
1928年8月29日	謝が農民組合の中央委員会に参加し、青年部、婦女部、救済部の三つの提綱が可決された。
1929年2月5日	謝と楊克煌の国際書店が正式的に開業する。
1930年10月	松山会議。謝と上大派が争いに。
1931年1月12日	改革同盟が成立。
1931年6月26日	謝、楊が日本警察に逮捕された。
1939年4月7日	謝が出獄。
1945年8月14日	玉音放送。
1947年2月27日	二二八事件が爆発。
1947年6月	謝が香港に到着。
1947年9月25日	『新台灣叢刊 第一輯』が刊行。



1948年5月1日	中共が五一宣言を発表。
1948年7月12日	台灣民主自治同盟が正式に成立する。主席は謝雪紅、理事は楊克煌、蘇新。
1957年年末	反右運動。謝は激しい批判闘争を受けていた。
1958年1月	謝は台盟主席の職務から解任され、中共党員の党籍も剥奪された。
1966年8月8日	文化大革命開始。
1966年10月	謝と楊が紅衛兵に住所から追い出された。
1970年11月5日	謝が亡くなる。
1978年8月29日	楊克煌が亡くなる。

資料與文獻

【中文單行本】

Nancy Hsu Fleming 著、蔡丁貴訳『狗去豬來 二二八前夕美國情報檔案』、
台北：前衛出版社、2009 年 2 月。

小熊英二「「異身同體」之夢」『近代化與殖民 日治台灣社會史研究文集』、
台北市：台大出版中心、2012 年 4 月。

台灣總督府警務局編、吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌』、台北市：南天、
1933-1942 年。

謝雪紅口述、楊克煌筆錄、楊翠華編『我的半生記』、台北市：楊翠華、2004
年。

葉榮鐘、『日據下台灣政治社會運動史（上）』、台中市：晨星、2000 年。

古瑞雲『臺中的風雷』、台北市：人間、1990 年。

列寧著、中共中央馬克思、恩格斯、列寧、斯大林著作編譯局編譯「紀念葛
伊甸伯爵」、『列寧全集 第十六卷』、北京：人民出版社、1988 年 10 月。

陳芳明『謝雪紅評傳』、台北市：麥田出版、2009 年。

陳芳明『殖民地台灣 左翼政治運動史論』、台北市：麥田出版、2006 年。

陳翠蓮『台灣人的抵抗與認同 1920-1950』、台北市：遠流出版公司、2008
年 8 月、P73。

彭明敏『逃亡』、台北市：玉山社、2009 年 6 月。

張漢裕編『蔡培火全集（一）家世生平與好友』、台北市：財團法人吳三連臺灣
史料基金會、2000 年 12 月。

張漢裕主編『蔡培火全集（四）政治關係—戰後』、台北市：吳三連臺灣史料
基金會、2000 年、P37-40。



楊克煌『台灣人民民族解放闘爭小史』、台北市：海峽學術出版社、1990年10月。



盧修一、『日據時代台灣共產黨史』、台北市：前衛、1989年。

蘇新『未歸的台共鬥魂 蘇新自傳與文集』、台北市：時報文化、1993年。

蘇新『憤怒的台灣』、台北市：時報文化、1993年。

【日文單行本】

陳芳明著、森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず』、東京：社會評論社、1998年。

蔡培火『日本々國民に與ふ』、東京：香柏社書店、1928年4月。

【中文新聞】

謝雪紅「台灣事變女英雄謝雪紅告同胞書」、『南僑日報』、シンガポール、1947年8月25日。

謝雪紅談「組織の力で自由を奪還する 幾何か良い生活が出来る」、台北：『台灣新民報』第323號、1930年7月26日。

「台灣民主自治同盟首席代表謝雪紅發言」、『人民日報』、北平、1949年9月24日。

【中文雜誌・論文】

一斐「明天的台灣」、『新臺灣叢刊第三輯 明天的台灣』、香港：新台灣出版社、1947年12月1日、P14-17。

丁原英、張振鵠ら「台灣問題資料輯錄」、『近代史資料』、1954年第3期、北

京市：科学出版社。

林瓊華「流亡、自治與民主：試論陳芳明著作『謝雪紅評傳』之貢獻及爭議」、『台灣風物』、60:2、台北縣：臺灣風物雜誌社、2010年6月、P147-174。

林瓊華「女革命者謝雪紅的『真理之旅』(1901-1970)」、『第六屆中華民國史專題論文集』、台北縣：國史館、2002年、P1-102。

林冠瑜、「論述的彼端——蔡培火話語中的性格與心理」、『臺灣史料研究』、vol. 32、台北市：吳三連台灣史料基金會、2008年12月、P136-160。

梟紹「自治與正統」、『新臺灣叢刊第四輯 自治與正統』、香港：新台灣出版社、1948年1月1日、P19-23。

斐英「一個台灣婦女的申訴」、『新臺灣叢刊第二輯 勝利割台灣』、香港：新台灣出版社、1947年11月1日、P27-30。

洪可均、「日本與中國——蔡培火的『母國』與『祖國』」、『政大史粹』vol. 23、台北市：國立政治大學歷史學系、2012年12月、P77-107。

陳翠蓮、「大正民主與台灣留日學生」、『師大台灣史學報』、第6期、台北市：國立臺灣師範大學臺史所、2013年12月、P53-99。

陳翠蓮「抵抗與屈從之外：以日治時期自治主義路線為主的探討」、『政治科學論叢』、Vol. 18、台北市：國立臺灣大學政治學系、2003年6月、P141-169。

林天雄、「訪陳炳基、吳克泰、蔡子民談二二八起義和謝雪紅事件」、『歐洲通訊』、Vol. 13、1974年10月。

黃文源「雙新記——論蘇新與吳新榮的「抵抗」之道」、『臺灣史料研究』、Vol. 136、台北市：吳三連台灣史料基金會、2010年12月、P73-94。

蔡培火「對內根本問題之一端」、『台灣青年』、Vol. 1-1、漢文之部、東京。

【日文雜誌・論文】

蔡培火「我島と我等」、『臺灣青年』、Vol-2、1920年10月15日、東京。

蔡培火「吾人の同化觀」、『臺灣青年』、Vol-2、1920年8月15日、東京。

蔡培火「中日親善の要諦」、『臺灣青年』、Vol13-2、1921年8月15日、東京。

